梅園三語　玄語　第四冊

地冊没部

丁未浄本準拠

玄語目（げんごもく）

地冊（ちさつ）　没部（ぼつぶ）

天界の冊（てんかいのさつ）

宇宙（うちゅう）　並びに圖（ならびにず）

方位（ほうい）　並びに圖（ならびにず）

機界の冊（きかいのさつ）

轉持（てんじ）　並びに圖（ならびにず）

形理（けいり）　並びに圖（ならびにず）

玄語

地冊　没部

天界の冊

宇宙

四八六〇［四界］鬱浡の活、

四八六一混淪の立、

四八六二神に在れば則ち神は變じ天は定る、

四八六三物に在れば則ち機は動き體は實す、

四八六四實は虚と偶す　動は靜と偶す　而して

四八六五靜は實と伴う　動は虚と伴う　故に

四八六六其の精は通塞す　而して方位を地とす、

四八六七其の麁は轉持す　而して虚實を物にす、

四八六八體は　散結して玄界に入り　覆載して文章を具す、

四八六九性は　色を以て日影を成し　性を以て水燥を成す、

四八七〇［通塞］經緯なる者は條理の大綱なり。

四八七一没中は則ち能く剖對す、

四八七二露中は則ち能く通塞す、

日本　鎮西　三浦晉　安貞　著

(PB 363)

(I 433a)

四八七三　通は以て時を爲す、
四八七四　塞は以て處を爲す　是れ乃ち
四八七五　物の宅する所なり、
四八七六　期の路する所なり、
四八七七　時は則ち宙なり　衰衰として移る、
四八七八　處は則ち宇なり　坱坱として住す、
四八七九　住する者も亦た移る、
四八八〇　移る者も　亦た住す、
四八八一　鬱滃混淪の中。
四八八二　神は爲し天は成す、
四八八三　宇は容れ宙は率ゆ、
四八八四*　宇は容れ宙は居る、
四八八五　宙は率い期は從う、
四八八六　期なる者は物の經なり、
四八八七　物なる者は期の緯なり　故に
四八八八　物は其の體を緯に寓す、
四八八九　氣は其の期を經に引く　故に
四八九〇　處は物を得て體を託す、

四八九一　時は期を得て神を見す、
四八九二　物なる者は。神と物となり。
四八九三　神は衰衰に爲成す、
四八九四　物は坱坱に散結す、
四八九五　爲成は能く始終を循環す、
四八九六　散結は能く大小を布列す　故に
四八九七　散結の間、大小は竝び立つ、
四八九八　始終の間、長短は競い走る、
四八九九　坱坱に居りて窕せず、以て天地の大を見る、
四九〇〇　衰衰に従いて窮らず、以て運轉の長を觀る、
四九〇一　處は以て中を含む、中なる者は處に幹たる者なり、
四*九〇二　時は以て今を開く　今なる者は時に活する者なり、故に
四九〇三　坱坱は物を容れ、中　能く之を維す、
四九〇四　衰衰は期を率い、今　能く之を運す、而して
四九〇五　維する者は能く没す、
四*九〇六　運する者は能く見る、故に
四九〇七　宇容は其の坱坱を露さず、
四九〇八　宙率は其の衰衰を見さず、

［今中］

(PB 364)

四九〇九　物　立ちて中を認む、
四九一〇　時　運して今を見す、
*四九一一　既已に物を露すれば、則ち小の小と雖も、猶お破る可きなり、唯
*四九一二―一三　中は則ち破る可からざるなり、破る可からざる者に非ざれば、
四九一四　奚んぞ天地を載せて撓まざるを得ん、
*四九一五　既已に頃を刻すれば、則ち短の短と雖も、猶お剖く可きなり、唯
*四九一六―一七　今は則ち剖く可からざるなり、剖く可からざる者に非ざれば、
四九一八　奚んぞ萬露を湊めて遺さざるを得ん、
四九一九　神は用いざる所莫し、故に時期は、各、通じて、
四九二〇　時は往き期は來る、來る者は將に當らんとす、
四九二二―二三　往く者は既に違す、而して今は則ち將既の會する所なり、
*四九二四　物は體せざる所莫し、故に處物は、各、立して、
四九二五　處は容れ物は居る、居れば則ち之に乘る、
四九二六―二七　容れば則ち之を載す、而して中は則ち乘載の所在なり、故に
四九二八　時に隱見有り、
四九二九―三〇　處に没露有り、没處は、則ち萬根の託する所なり、
四九三一　氣を發して給するに疲れず、
四九三二　質を收めて容るるに充たず、

(PB 365)

(I 433b)

見時は、則ち衆神の遊ぶ所なり、
來るを迎えて當るに遺さず、
往くを送りて違うに停らず、故に
四九三三
時は神物に路す、而して今は當遇の天を爲す、
四九三四
塞がる者は、通に待たざる能わず、
四九三五
通ずる者は、塞に偶せざる能わず、
四九三六ー三七
塞がる者は維して住す、故に通ずる者は當りて移る、
四九三八
通ずる者は進みて率ゆ、故に塞がる者は追いて從う、是を以て
四九三九
塞がる者は直ちに通ずる、
四九四〇
通ずる者は直ちに塞がる、故に一塞中に住移有り、
四九四一
一通中に率從有り、
四九四二
從がう者は、氣 來る有り、
四九四三
率いる者は、氣 往く有り、
四九四四
氣は來を以て生し、往を以て化す、故に
四九四五
塞氣 來るを以て常に活するは、神の爲なり、
四九四六
通氣 往くを以て常に通ずるは、天の成なり、
四九四七
來る者は能く去る、
四九四八
往く者は能く住す、故に
四九四九
四九五〇
四九五一
四九五二

四九五三　坱坱の間は、往住せざる莫し、
四九五四　衰衰の中は、來去せざる莫し、
四九五五　往く者は來る者に當りて、往く、
四九五六　來る者は往く者に遇いて、去る、
四九五七　當遇の會。時は則ち今を爲す、
四九五八　　事は則ち命を成す、
四九五九　今の既に過ぎたるを、前と曰う、
四九六〇　今の未だ及ばざるを、後と曰う、
四九六一　送迎の囿する所を除けば。則ち均しく今なり。
四九六二　神機は來るに活す、
四九六三　天跡は往くに成る、故に
四九六四　今を以て前後を觀れば。猶お中に居りて左右を觀るがごとし。
四九六五　精は窺い難し、
四九六六　麁は知り易し、是を以て
四九六七　縱い神の來る有るとも、而も物の往く無く、
四九六八ー六九　物の往く有るとも、而も神の來る無くんば、則ち何を以てか當遇の今を得ん、
四九七〇　天地は今を得て見る、
四九七一　事物は今を得て成る、故に

機跡は始終を見し。時處は無窮を成す。
性は物外に立たず、
物は性外に成らず、
處は神物に宅し、而して中は乘載の地を爲す、
今なる者は、往くを送り來るを迎え、將にする者を前にす、
既にする者を後にす、
時なる者は、彼此相い向う、
彼の前とする所は、我の後とする所にして、而して
我の前とする所は、彼の後とする所なり、是の故に
往く者は將にせんとするに向いて既にするに背く、
來る者は將にせんとするを離れて既にするに就く、
地なる者は、彼此相い背く、
午の上とする所は、子の下とする所にして、而して
子の上とする所は、午の下とする所なり、是の故に
午なる者は午を上にして子を下にす、
子なる者は子を上にして午を下にす、
其の事は則ち反す、
其の理は則ち同じ、故に

四九九〇ー九一　来る者よりして之を謂えば、則ち既往を前にす　而して
四九九二　　將來を後にす、
四九九三ー九四　往く者よりして之を謂えば、則ち率いて往く所を前にす　而して
四九九五*　　遇いて去る所の者を後にす、
四九九六　故に來る者は迎うを見て去る、
四九九七　　往く者は送るを見て伴う、
四九九八　來りて將に去らんとするの頃にして見る、
四九九九ー〇〇　將來既去なる者は則ち隱る　故に生する者は將にせんとするに居る、
五〇〇一　　化する者は既にするに去る、
五〇〇二　通に非ざる者莫ければ、則ち往くとして生化に非ざる莫し、
五〇〇三ー〇四*　往くとして生化に非ざる者莫しと雖も。而も精麁没露は物を異にす。
五〇〇五　則ち其の跡は　各　同じからざるなり。故に
五〇〇六　期の有る者は、生化に跡有り、
五〇〇七*　期の無き者は、生化に跡無し、故に
五〇〇八　將にせんとするに生ずれば則ち來りて化に向う、
五〇〇九　既にするに化すれば則ち去りて生より遠ざかる、
五〇一〇　既に生すれば則ち起りて往くに從う、
五〇一一　化を爲せば　則ち及ばずして息む、故に

(PB 367)

五〇一二　物に中外有り、
五〇一三　期に始終有り、
五〇一四ー一五　既に生ずる者は　則ち送るを見て伴う　伴ないて及ばず、　以て其の化を觀る、
五〇一六ー一七　始まりは既にするに在り、　終わりは將にせんとするに在り、
五〇一八ー一九　將に生ぜんとする者は、　則ち迎うを見て來る　來りて停まらず、　以て其の化を觀る、
五〇二〇　始まりは將にせんとするに居り、　終わりは既にするに當る、
五〇二一ー二三　中なる者は氣を吐き質を喩う、　虚に遠く實に近し　故に氣は吐を見て發す、
五〇二四　質は喩を見て收む、
五〇二五　吐に遠く喩に近きの地にして没す、
*五〇二六ー二七　之を吐し之を喩する者は則ち露す、　故に解る者は外に遊ぶ、
五〇二八　結ぶ者は中に依る、
五〇二九［期物］　夫れ處なる者は物を容れ、　物は處に居る、
五〇三〇　時なる者は期を率い、　期は時に從う、　故に
五〇三一　處と時と經緯を偶す、
五〇三二　物と期と經緯を偶す、　故に
五〇三三　今は能く事を見すと雖も、　而れども諸を物に立てざれば、　則ち將た奚んか爲さん、
五〇三四　處は能く物を露すと雖も、　而れども諸を期に移さざれば、　則ち將た奚んか成らん、
五〇三五　期は物に因りて事を成す、

(PB 368) (I 434b)

五〇三六　物は期に因りて功を畢う、
五〇三七　　處なる者は坱然たり　物にして後　紀する所有り、
五〇三八　　時なる者は衰焉たり　期にして後　紀する所有り
五〇三九ー四〇　其の物は則ち天地なり　天は規矩を有し　東西南北を成す、
五〇四一　　地は拗突を有し　湖海山野を成す、
五〇四二ー四三*　時なる者は時氣なり　期に往來有り　緩急盈縮を見す、
五〇四四　　時に會違有り　明暗寒熱を示す　故に
五〇四五　湖海山野は　東西南北に依りて　方處を紀す、
五〇四六　明暗寒熱は　緩急盈縮に依りて　節序を成す、
五〇四七　天地は物を成す、
五〇四八　節序は期を成す　是に於てか。
五〇四九　物は事を成す、
五〇五〇　期は功を畢う、
五〇五一　衰衰は窮まらず、期は則ち始終す、始終なる者にして、而も長有り短有り、
五〇五二　坱坱は無垠なり、物は則ち天地す、天地なる者にして、而も大有り小有り、
五〇五三*　大物は坱坱に居りて窕せず、故に其の物たるや大なり　而して
五〇五四*　小物は天地を分ちて竝び居る、故に其の物たるや小なり、
五〇五五*　長期は衰衰に從いて已まず、故に其の期たるや長なり　而して

五〇五六 短期は歳月を追いて及ばず、故に其の期たるや短なり、而して
五〇五七 大小長短。亦た自から統散有り。
五〇五八 統中は、則ち天は大にして、而して地は小に、轉は長にして運は短なり、
五〇五九 散中は、則ち天地は大にして、而して萬物は小に、運轉は長にして衆期は短なり、
*五〇六〇 [人境] 夫れ人は一小物を以て、一短期を得る、
五〇六一 弾丸の如く實結する者を得て之を踏む、
五〇六二 瑠璃の若く清虚する者を見て之を仰ぐ、
五〇六三 明暗は相い換る、寒暑の相い推す者を時にして之を經る、
五〇六四 乾潤は相い生ず、動止の相い立つ者を侶にして之に依る、
五〇六五 我の麁體を以て。而して物の麁露を認む。故に
五〇六六 日月山海は、我の天地なり、
五〇六七ー六八 天は瑠璃の若く、地は弾丸の若くなるに由りて、之を觀れば。覆う者は天を爲す、
五〇六九 載る者は地を爲す、
五〇七〇 然りと雖も。天なる者は、氣の名なり、而して
五〇七一 地なる者は、物の名なり、
五〇七二 故に處を以て時に對すれば。則ち
五〇七三 時なる者は氣なり、天を爲す、
五〇七四ー七六 處なる者は物なり、地を爲す、同じく此れ處なり。或いは天と呼ぶ、

或いは地と呼ぶ、

五〇七七　猶お是れ此の一身。父に對して子と呼び。

五〇七八　子に對して父と呼ぶがごとくなり。　各　會する所有るなり。故に

*五〇七九　瑠璃の如き天、　(I 435a)

五〇八〇　弾丸の如き地は、　則ち天地を物中に開きて有り。

五〇八一ー八二　次第に相い開く。則ち天地は愈いよ有り。而して氣物は愈いよ瑣なり。

五〇八三ー八五　晝夜冬夏は、我の期紀なり、

五〇八六　水燥の中に於て絪縕す、

五〇八七　動植の物に於て相い依る、

五〇八八　天地は坱坱に物す、而して萬物は其の中に竝び立つ、

五〇八九ー九〇　歳月は衰衰に期す、而して衆期は其の間に競い走る、　(PB 370)

五〇九一ー九二　時は處に時す、

五〇九三　處は時に處す、

五〇九四　期は物に期す、

五〇九五　物は期に物す、

五〇九六　天地は麁を以て露す、

五〇九七　［覆載の經緯］

五〇九八　蓋し宇宙は精を以て没す、

五〇九九　天は動止の機を畜う、
五一〇〇　地は虚實の體を有す、
五一〇一　天は虚と雖も而も動を以て其の體を剛にす。
五一〇二　何ぞ地の實を以て其の體を堅くにするに異ならん。故に
五一〇三　麁露の天地は。堅ならざれば則ち剛なり。故に
五一〇四　地の物を立つると、
五一〇五ー〇六　天の物を浮ぶると、堅剛は同一なり。
五一〇七　剛處は、日影の象之を占む、
五一〇八　堅處は、水燥の物之を占む、是に於て
五一〇九　象質は天地を隔てて居る、
五一一〇　歲運は轉持を分ちて行く、
五一一一　象と質と各其の氣を得て配す。
五一一二　氣象は時節を紀すの物を爲す、
五一一三　氣質は生化を爲すの物を爲す、故に
五一一四　虚動は、經具なり、
五一一五　實靜は、緯具なり、
五一一六　實靜は天地を成す、而して
五一一七　虚動は轉持を成す、

五一一八　轉中は、則ち萬象運轉す、期は往復循環に在り、
五一一九　持中は、則ち萬質相い換る、期は生化鱗比に在り、故に
五一二〇　轉物は常に一體を持す、
五一二一　持物は毎に其の體を換う、
五一二二　大物は小物を容る、
五一二三　有窮は無窮に居る、
五一二四　小物なる者は有窮なり、體體相い換る、引きて之を無窮に致す、
五一二五　大物なる者は無窮なり、其の體を常に持す、生化は一體なり、
五一二六　生化一體なる者は、生化すと雖も、而も其の跡を露せず、故に無窮と曰う、
五一二七　體體相い換る者は、亦た無窮を致すと雖も、
五一二八　前體は後體に非ざるを以て、生化の跡は顯なり、故に有窮と曰う、
五一二九　前體は後體と一なれば、則ち生化は其の中に行わる、而して其の物は無窮の若し、
五一三〇　前體は後體と別なれば、則ち彼は化し此は生す、而して其の物は有窮の若し、
五一三一　無窮なる者は、終りて始まる、
五一三二　有窮なる者は、始まりて終る、
五一三三　其の道を同せずと雖も。而れども生化の通に於ては。則ち一なり。
五一三四　人なる者は。麁物なり。小體なり。
五一三五　身は畫する所有り、

(I 435b)

五一三六　生は盡きる所有り、
五一三七　盡きる有るの生を以て、
五一三八　畫する所の身を有す、
五一三九　混成を以て。其の智は囿する所有り。
五一四〇　麁小を以て精大を推す。大物に窒す、
五一四一　　長期に眩む　而して
五一四二　蓋し萬物は大物に居る、
五一四三　　衆期は長期に從う
五一四四*－四五　地は、塊焉たる一圓物なり、故に下は能く上を爲す、西は能く東を爲す、
五一四六　時は氣を以て通ず、
五一四七　處は體を以て塞る、
五一四八　塞中、天は動き地は靜る、
五一四九　通中　事は移り物は住す
五一五〇　住する者は止に定まる、
五一五一　移る者は行に通ず、
五一五二　中なる者は、止の主、物は之に居る、　位は之に立つ、
五一五三　今なる者は、移の主、事は此に行わる、　物は此に換る、
五一五四　事は此に行わる、

五一五五　物は此に換わる、
五一五六　中は、立ちて移らず、
五一五七　今は、移りて居らず、
五一五八　立つ者は、中外に位有り、
五一五九　移る者は、來去に方無し、
五一六〇　氣質は坱中に物す、
五一六一　氣象は衮中に跡す、
五一六二　氣質は物ならざれば、則ち焉んぞ處を露するを得ん、
五一六三　氣象は跡ならざれば、則ち焉んぞ時を紀するを得ん、
五一六四　氣は西し象は東す、動を以て時の紀を成す、
五一六五　天は外し地は中す、靜を以て處の位を立つ、
五一六六　坱坱の立にては、中は破る可からず、而して外は邊無し、
五一六七　體は一なりと雖も、而も一面一背の二用有り、
五一六八　衮衮の移にては、今は剖く可からず、而して時は界無し、
五一六九　行は一なりと雖も、而も一往一來の二跡有り、
五一七〇　圓中は一心を點して、外は際涯無し、
五一七一　直中は一頃を見して、外は前後を隱す、
五一七二　中なるや、南に中す、

北に中す、
西に中す、
東に中す、
無際涯に中して、　而して能く移動する者を維す、
今なるや　前に今す、
後に今す、
去るを積みて後を厚くせず、
來るを奪いて前を薄くせず、而して能く靜立する者を移す、
時は、悠焉たる一直氣、前を轉じて後と爲す、生を收めて化と爲す、
彼の水車を觀るに。一邊は水を載せ、仰ぎて來る、
一邊は水を瀉し、俯して往く、
水車は有體の往來なり、猶お且つ端を見ず、

（編集による空白）

前後なる者は、無象の往來なり、
孰れか逆えて其の首を見ん、
孰れか將って其の尾を見ん、蓋し
時なる者は、往來を以って前後と爲す者なり、
期なる者は、生化に由りて始終と爲す者なり、

五一七三
五一七四
五一七五
五一七六
五一七七
五一七八
五一七九
五一八〇
五一八一－八二*
五一八三－八四*
五一八五
五一八六*
五一八七－九〇
五一九一
五一九二
五一九三
五一九四
五一九五

時に往來有り、物は當りて前後を分つ、
期に始終有り、時は移りて新故を成す、是を以て
天地に前後有り、
萬物に新故有り、
人は始終新舊の質を以て。駸駸たる者を追う。
是に於て。將迎の間。智の晝する所有り。
以て疑いを天地に爲す。今を以て故を觀れば。則ち鴻濛たり。
後を以て今を觀れば。則ち今は胡ぞ鴻濛たらざらんや。
既往將來は、典籍の傳る所、事跡の推す所を除く、而して智の至らざる所なり、
四方上下は、見聞の及ぶ所、思慮の至る所を除く、而して智の至らざる所なり、
塞がる所に於て。而して強いて之を通ぜんと欲す。故に
其の知る所は愈いよ廣くして、而して其の知らざる所は愈いよ遠し、
其の知る所は愈いよ皦にして、而して其の知らざる所は愈いよ曖し、
混混たる者をして粲粲たらしめんと欲す、
粲粲たる者をして混混たらしめんと欲す、
理を誣るに非ざれば。則ち自から蔽うなり。
過ぐれば　則ち後なり、
及ばざれば則ち前なり、

(PB 373)

五一九六
五一九七
五一九八
五一九九
五二〇〇
五二〇一
五二〇二
五二〇三―〇四
五二〇五
五二〇六
五二〇七
五二〇八
五二〇九
五二一〇
五二一一
五二一二
五二一三
五二一四

天は此の間に往來す、
物は此の間に生化す、
知運感應の爲す所、
當遇會違の成る所、
人に於ては。則ち治亂興廢。酬醋黜陟。皆な此に於てす。
我は此に生化し。自から此に起滅す。
無際の有際を容れ、有窮の無窮に通ずるを知らず、
此の無窮を有窮に於て窮めんとするは。難し。

［循環鱗比］

萬物は成壞し、給資を用う有り、
衆期は始終し、旺衰を爲る有り
循環する者は氣象なり、
鱗比する者は氣質なり、
循環する者は、各期、相い定まる、故に之を推すに、會違は數を出でざるなり、
鱗比する者は、各期、定まる無し、故に之に從うに、變化は豫す可からざるなり、
氣象は運轉し、天を周り地を周る、其の機は違わず、參差の中に整齊す、
日を爲し年を爲し、章を爲し紀を爲す者は、歲なり、
象質は升降し、天を行き地を立つ、其の機は定らず、整齊の中に參差す、

(PB 374, I 436b)

五二三二　風雷雲雨、木壽豊倹なる者は、運なり、
五二三三　是を以て循環する者は精なり、
五二三四　周周は端無きなり、
五二三五　生化は相い接す、
五二三六　始終は相い依る、
五二三七　鱗比する者は麁なり、
五二三八　一過して跡を顯にす、
五二三九　起滅して始終を爲す、
五二四〇　旺衰して新故を爲す、而して
五二四一　生化の天地に通ずるに於ては。則ち隔てざるなり。故に
五二四二　各體は竝び立つ、
五二四三　衆期は相い追う、
五二四四　各體を大體に比するに、大體は無垠なり、
五二四五　人は數を立て、而して后物體の廣狹小大を比方す、
五二四六　衆期を長期に比するに長期は無際なり、
五二四七　人は數を立て、而して後經歴の久近長短を比方す、
五二四八　人は已に立つ所有り。彼の循環鱗比を觀る。
五二四九　循環は定度常期有れば、則ち

五二五〇　各行を計えて而して會離を定めんと欲す、曆の起こる所なり、
五二五一　鱗比は定度常期無くば、則ち
五二五二　歲月を係けて而して長短を比べんと欲す、壽の用うる所なり、
五二五三　天に長短の各期有り、
五二五四　人は奇偶の數を設け、乘除して之を計う、
五二五五　物に參差の變化有り、
五二五六　人は書數の技を設け、連綿として之を記す、蓋し
五二五七　天なる者は測る可からず。
五二五八*　人巧は接物の方を窮めんと欲す、故に
五二五九　衡を立てて輕重を辨じ、
五二六〇　量を立てて多少を知り、
五二六一　度を立てて長短を測り、
五二六二　漏を立てて久近を分つは。人の設なり。蓋し
五二六三　處なる者は、天動地止の處なり、
五二六四　　虛する者は遠く浮く、
五二六五*　　實する者は近くに沈む、
五二六六*　　遠浮近沈は共に露す、而して
五二六七　立つ者は能く容れ能く載す、而して

載の微は、此の廣大を露す、
時なる者は、神爲天成の時なり、
前なる者は將に來らんとす、
後なる者は引て去らんとす、
將來引去は共に隱る、而して
當る者は隨いて見れ隨いて隱る、而して
當の忽は、此の攸久を成す、
物は、中を守りて立ち、外に向いて通ず、
神は、今に當りて活し、後に向いて息む、
物は通じて體を失う、
神は息して跡を留む、
跡を留めて神は息む、
機を發して神は活す、
統散して各おの神を有す。而して小は則ち大に資る。故に
機は發して絶えず、之を生生と謂う、
跡は收して已まず、之を化化と謂う、
循環なる者は、往復して期を爲す、始まる者は終る、終る者は始まる、
鱗比なる者は、生死して期を爲す、死する者は息む、生する者は繼ぐ

五二六八
五二六九
五二七〇
五二七一
五二七二
五二七三
五二七四
五二七五
五二七六
五二七七
五二七八
五二七九
五二八〇
五二八一
五二八二
五二八三
五二八四－八六
五二八七－八八

(I 437a)

五二八九　天物は長存の體なり、
五二九〇　地物は毎換の體なり、
五二九一　存換は同じからずと雖も。彼此は同じく通中に生化す。故に
五二九二　體を存する者に於ては、則ち歲と曰い、曆と曰う
五二九三　體を換うる者に於ては、則ち場と爲し、壽と爲す、蓋し一なり。故に
五二九四　循環する者に於ては、漏を置きて時を刻す、
五二九五ー九七　日の一周地の頃を、一百と爲す、月は天を周る、日は天を周る、
五二九八　東西兩線の相い旋るは、頃を此に資る、故に
五二九九　會離の紀は、亦た此に成る、
五三〇〇　鱗比する者に於ては、則ち歲を定め日を立つ、
五三〇一ー〇二　日の一周天の頃を、歲と爲す、歲中は明暗を會す、月を置き日を置く、
五三〇三　長短夭壽の經歷は、此に於て資る、故に
五三〇四　今、循環する者は、人の資る所に就きて之を言えば、則ち
五三〇五　日の一周地は一百刻、
五三〇六　月の一周地は一百三刻、
五三〇七　日の一周天は、三萬六千五百二十三刻にして贏る、
五三〇八　月の一周天は、二千七百五十五刻にして贏る、
五三〇九　天の成る所を以て之を言えば、

五三一〇　各各一期にして、期は定まるに由りて、推す所を逃れず、
五三一一　鱗比する者は、人の資る所に就きて之を言えば、
五三一二　長壽は千萬歳にして、
五三一三*　短期は夕を崇めず
五三一四　或いは數十歳、或いは十數日なり、
五三一五　天の成る所を以て之を言えば、
五三一六　各各一期、歳月の定期に比す、
五三一七　此の長短を察するを得る、故に
五三一八　奇偶を相い畳ねて。十を紀し百を紀す。皆な天の數に非ざるなり。
五三一九*　蓋し天地は大にして全、
五三二〇*　萬物は散にして小、
五三二一―二三　全なれば則ち神本は力、敵す、敵すれば則ち持す、
　　持すれば則ち久し、
五三二四―二五　散ずれば則ち神本は力、偏す、偏すれば則ち傾く、
　　傾むけば則ち顚る、
五三二六　衆期の壽を天地に於て爭うこと能わざる所なり。
五三二七*　天地なる者は物を以て成る、
五三二八　象質なる者は性を以て成る、
五三二九

五三三〇　象なる者は色を爲して見る、
五三三一　質なる者は性を爲して露す、故に
五三三二　日月景影は、色を虚中に於て見す、
五三三三　水火溼燥は、性を實中に於て示す、
五三三四　天地会易の物立ちて。星辰は上に散ず、
五三三五　　動植は下に聚る、而して
五三三六　星辰は循環の物なり、
五三三七　動植は鱗比の物なり、
五三三八　循環する者は其の期、攸久なり、
五三三九　鱗比する者は其の期、斯須なり、
五三四〇　鱗比の中にも亦た神本に長短有り。
五三四一*　本氣に富める者にして、而して能く久なり、
五三四二　本氣に乏しき者にして、而して能く短なり、
五三四三　神氣に富める者にして、而して能く變化す、
五三四四　神氣に乏しき者にして、而して變化に拙し、
五三四五　其の錯綜に至りては。則ち
五三四六　實物攸久と雖も、而も鹵輭動植と壽を爭う能わず、
五三四七　雲雨倏忽と雖も、而も朝菌蟪蛄は、旦夕を持せず、夫れ

(I 437b)

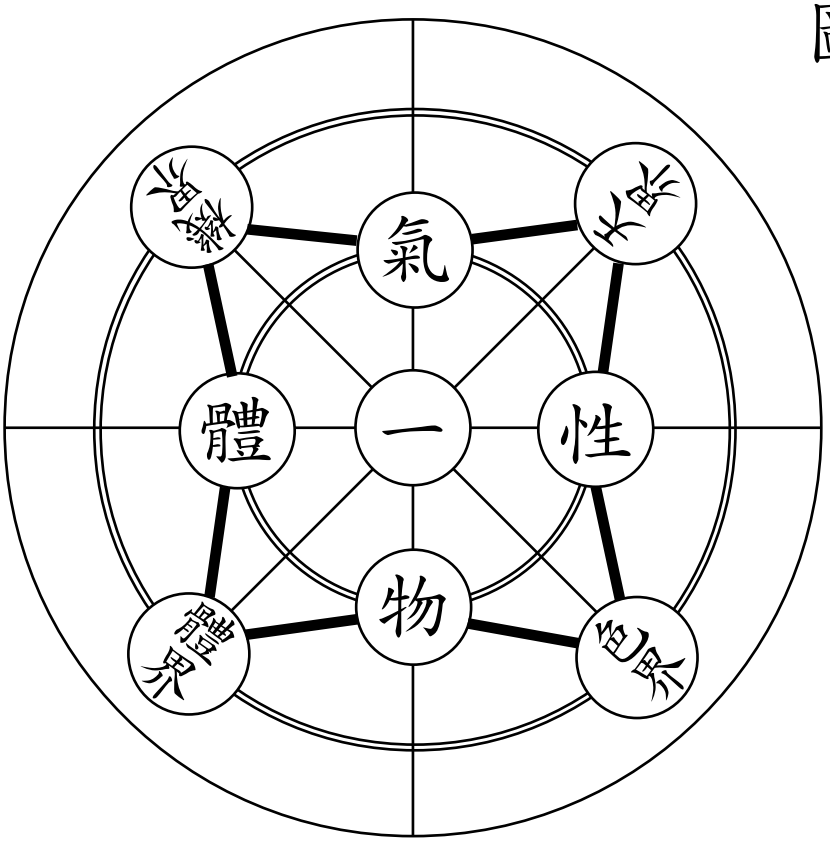
(PB 377)

五三四八
五三四九ー五〇
五三五一
五三五二
五三五三
五三五四
五三五五
五三五六
五三五七
五三五八

地は止り天は行く、
天は令し地は奉ず　是に於て天は日月を率いて、　明暗照蔽す、
　地は従い天は行きて、　寒熱粛舒す、
人は其の事を紀して暦と曰う、　乃ち晦望會離、晝夜冬夏の事なり、
時は移りて物は換り、人は運し事は變ず、是に於て
萬物變動の事、人世換革の態は、其の事を紀して史と曰う、乃ち
日月山河、人物鳥獣の事なり、是を以て
各周・各轉・各期を爲す者は、天の暦なり、
各周を相い比し、其の久近を方べ
止地に立ちて轉天を觀、規矩を建てて、會違を正す者は、人の暦なり、

(PB 378)

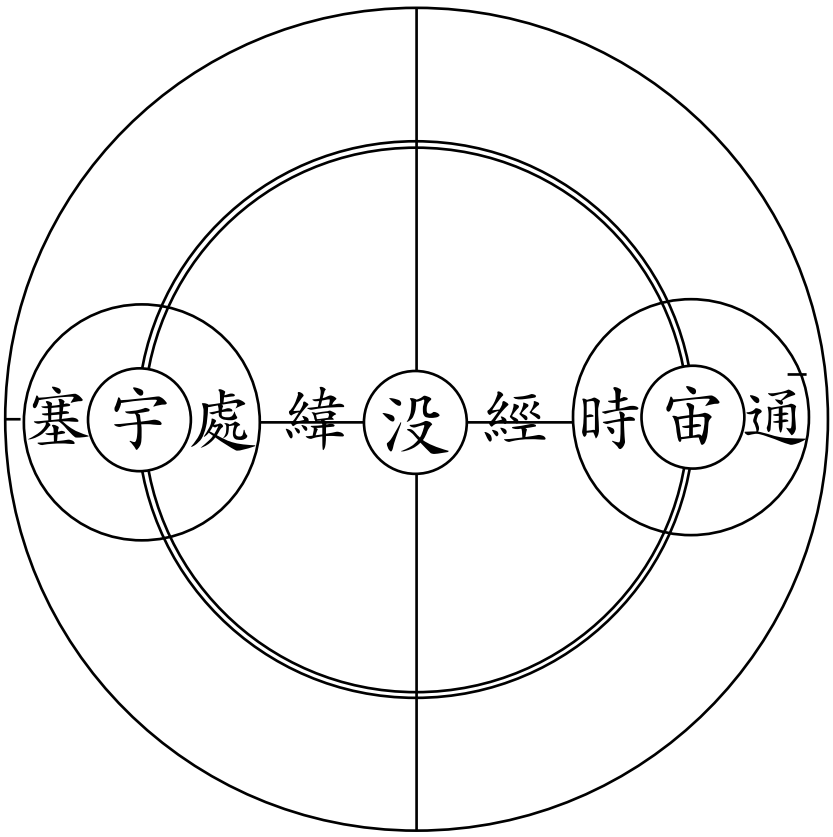
四界圖



宇宙轉持圖

天位
地位
地位
天位
思
轉
念
念
念

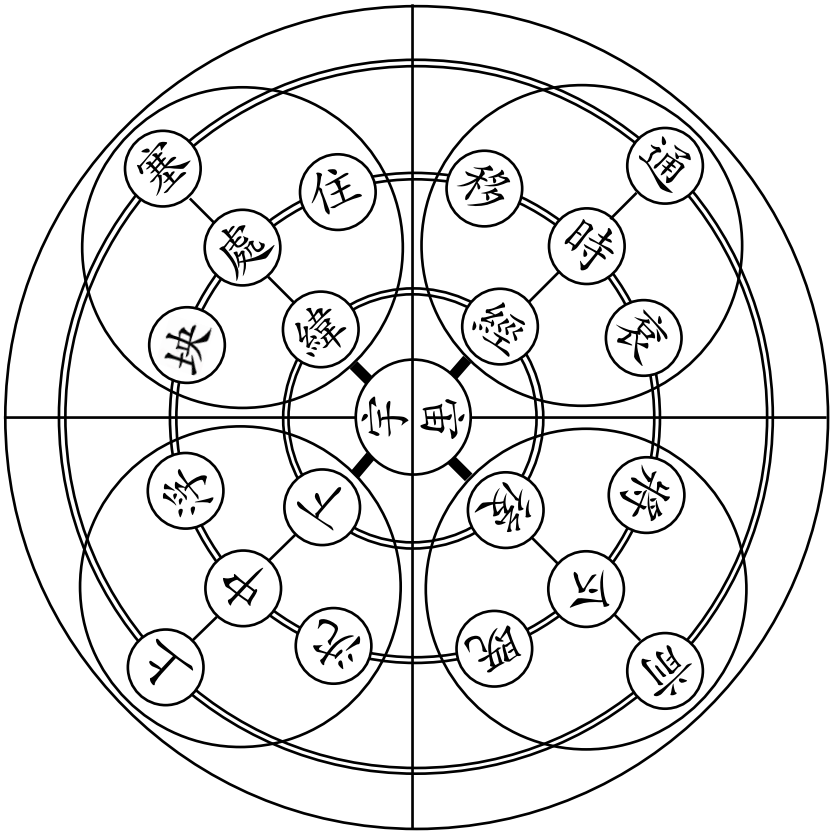
宇宙圖



宇宙方位圖

天位
地位
天位
地位
經
緯
宙
時
空
間
宇
空
間
宇
宙
空
間
時
宙
時
空
宇
宙
空
間
時
宙
時
空
宇
宙
空
間
時
宙
時
空

時處今中圖



大處期物圖

方位

五三六八［方位］坱然たる其の處。物は之を得て居る。然り而して
五三六九　物は則ち神を得て活す、
五三七〇　神は則ち物を得て立す、
五三七一　坱坱は位を得ざれば、則ち爭でか能く　物を容れん、
五三七二*　活動は方を得ざれば、則ち焉んぞ能く其の神を行わん、故に
五三七三*　位なる者は、立つ所の地なり、
五三七四　物は處を得ざれば則ち居らず、
五三七五　位を得ざれば則ち立たず、
五三七六　植は地に著きて立つ、
五三七七　動は地に依りて立つ、
五三七八　依著は異なると雖も。而も之を立つるに地に由るに於ては則ち同じきなり。
五三七九　我と物と。已に位に由りて立つ。小に由りて大を察するに。
五三八〇　天地は位を得ざれば則ち立たず。故に
五三八一　天は地を得て居る、
五三八二　地は中を得て立つ、故に
五三八三　外は容れざる所莫し、
五三八四　中は載せざる所莫し、

五三八五　方なる者は、行く所の路なり、
五三八六　車を置けば則ち箱、舟を泛かぶれば則ち水、故に
五三八七　上に在らざれば則ち下なり、
五三八八　左に在らざれば則ち右なり、居る者は位を以てせざること能わず、
五三八九　車を行れば軌に從う、舟を行れば風に從う、故に
五三九〇　東に方せざれば則ち西なり、
五三九一　從いて行かざれば則ち衡う、行く者は方を以てせざる能わず、
五三九二　位は基を爲して、物は以て此に立つ、
五三九三　方は路を爲して、氣は以て此に行く、故に
五三九四　宇宙なる者は。經緯の通塞なり。
五三九五　時の衰衰は、前後方を爲す、
五三九六　處の坱坱は、中外位を爲す、
五三九七　共に其の精なる者なり。
五三九八　神は轉持を見す、
五三九九　物は天地を露す、
五四〇〇　愈いよ其の方位に由る。
五四〇一　［形體］天地なる者は物なり。
五四〇二　物なる者は虛實の體、

（I 438a）

*五四〇三ー〇四　正斜の形、を以てして其の位に處す、
五四〇五　其の方を行く、故に
五四〇六　氣は動くと雖も、而も其の形は靜なり、
五四〇七　時は通ずと雖も、而も其の位は立つ、
五四〇八　位は形の靜を以て定る、
五四〇九　形は位の立を以て成る、是に於て
五四一〇　形は位に由りて理を布く、
五四一一　位は理に由りて中を定む、
五四一二　形位は相い成ると雖も。而も未だ虚實の體を得ざれば。
*五四一三　物は何を以てか立たん。故に
五四一四　物は形を舍てて存せず、
五四一五　形は物を除きて成らず、然り而して
五四一六　物體は形に依らずして立つこと能わず。
五四一七ー一八　中は地を無内に占む、而して其の外は垠り無し、故に位は立ちて圓、成る、
五四一九ー二〇　守は中を兩頭に見す、而して其の縫は腹を爲す、故に矩は立ちて規を成す、此の故に
五四二一　位は以て其の地を定む、
五四二二　形は以て其の體を成す、
五四二三　大物なる者は。動氣實體なり。

實體は位を得ざれば、則ち居ること能わず、
動氣は方を得ざれば、則ち行く可からず、而して
其の實體の立は。動氣の活を以てなり。是を以て
持中に在ては、則ち嘑喩に動く、
轉中に在ては、則ち運轉に動く、故に
位なる者は、體の立つ所なり、
方なる者は、氣の向う所なり、
體立ちて神其の中に活す、
方定りて氣其の中に運す、
蓋し體なる者は立す、
　神なる者は運す、
體は乃ち形を外に成す、形を成す者は、能く内なる者を統ぶ、（形の右に外と傍記。）
神は乃ち理を内に成す、内を成す者は、能く外なる者を貫く、故に
發する者は氣を中に資る、
收むる者は體を中に歸す、
中外なる者は坱坱の位なり。
時今の古今を行くと偶するなり。故に
大小は體を有す、而して

五四二四
五四二五
五四二六
五四二七
五四二八
五四二九
五四三〇
五四三一
五四三二
五四三三［四紀］
五四三四
五四三五
五四三六
五四三七
五四三八
五四三九
五四四〇
五四四一

五四四二　中外は體を没す、
五四四三　持際は内を爲す、
五四四四　轉際は外を爲す　故に
五四四五　内は能く輻持す、
五四四六　外は能く輪轉す、
五四四七　中なる者は　無内の一點なり、
五四四八　外なる者は　無垠の坱坱なり　故に
五四四九―五〇　地持なる者は小なり、小なる者は猶お容るるの内有り、
五四五一　容るるの内無き者にして、　而して後
五四五二　物として載せざる者莫し、物として載せざる者莫きが故に天地之に乘りて止る、
五四五三―五四　天轉なる者は大なり、大なる者は猶お容らるるの處有り、
五四五五　容らるるの處無き者にして、而して後
五四五六　物として容れざる者莫し、物として容れざる者莫きが故に天地之に居りて立つ、
五四五七　天地は一圓體なり。
五四五八　氣は見れ體の露するよりして之を分てば。則ち
五四五九　地は中を地心に於て占む、
五四六〇　天は中を轉心に於て占む、
五四六一―六二*　轉心は中を兩端に貫く、外なる可き者は縫を半の地に合す、

五四六三―六四　地心は中を無内に占む、外なる者は無垠に位す、故に
五四六五　天地より之を言えば、山壑水燥を載するの地は、中の一點に乘る、
五四六六　日月景影を容るるの天は、外の無垠に居る、
五四六七　覆載より之を言えば、覆おう所の日月景影は外を成す、
五四六八　載する所の山壑水燥は内を成す、
五四六九　轉持は内外を爲す、
五四七〇*　轉守は中端を爲す、是を以て
五四七一　轉内は持を裏む、
五四七二　持外は轉を載す、
五四七三*　斜より之を言えば。規中は能く守る、
五四七四　守外は能く轉ず、
五四七五　轉じて西を爲す、
五四七六　守って北を爲す、
五四七七　西面は象に逆う、
五四七八*　北外は守を環る、
五四七九　逆を東と爲す、
五四八〇　環を南と爲す、
五四八一　西北は則ち天の定方なり、

五四八二　上下は則ち地の靜位なり、
五四八三　東南は則ち轉の動方なり、
五四八四　内外は則ち持の動位なり、
五四八五ー八七　氣は動靜を分ちて　動は轉じ靜は持す　外を轉處と爲す、
五四八八　内を持處と爲す、
五四八九ー九〇　物は虚實を分ちて、　虚天實地は　下を地體と爲す、
五四九一　上を天體と爲す、
五四九二　内下は則ち本なり、　本なれば則ち中に歸して止る、
五四九三　外上は則ち末なり、　末なれば則ち坱坱に之きて際涯無し、
五四九四　轉は運を分つ。而して背馳を爲す。是に於てか。
五四九五　氣は東西南北を運す。
五四九六　混焉たる大物は、　中を以て其の依と爲す、
五四九七　上下内外の位の本づく所は、　散結發收の由る所なり、
五四九八　滾焉たる轉氣は、　極を以て其の依と爲す、
五四九九　東西南北の方の成る所は、　嘑嗡運轉の資る所なり、　是に於て
五五〇〇　動は其の形を斜にす、　而して以て方を行く、
五五〇一　靜は其の形を正にす、　而して以て位に居る、
五五〇二　車は輪を有すると雖も、　而も輪は軸に依りて旋らざること能わず、

軸は旋に幹たりと雖も　而も軸は輪を用いて行かざること能わず、　是を以て
西に向いて旋る者は　氣なり、
正立して之を西に向わしむる者は　氣の幹なり、　故に之を西軸と爲す、
東に向いて旋る者は　運なり、
斜側して之を東に向わしむる者は、　氣の幹なり、　故に之を東軸と爲す、
西軸は止りて其の位を守る、
東軸は動きて西軸を環る、　故に
東西なる者は。　各　輪旋すれば。則ち
東西に指點の地無し。唯だ
運輪は其の一規に通じて、　東せざる所莫し、
轉輪は其の一規に通じて、　西せざる所莫し、
已に一規に通じて、　西せざる所莫ければ、　則ち其の軸を爲して守る者は、
兩端に通じて、而して北せざるを得ず、　（其のを欠くか。）
已に一規に通じて、東せざる所莫ければ、　則ち其の軸を爲して環る者は、
其の兩端に通じて、而して南せざるを得ず、　是の故に
西北の方なる者は竪なり、
東南の方なる者は横なり、
人は天地の半を以て。己の天地と爲す。

五五〇三
五五〇四
五五〇五
五五〇六
五五〇七
五五〇八
五五〇九
五五一〇
五五一一
五五一二
五五一三
五五一四
五五一五*
五五一六
五五一七*
五五一八
五五一九
五五二〇

其の中央に立ちて。衡從　之を望む。是に於て守軸は兩端を爲す。
一を北と爲す、
一を南と爲す、
日去るの方を西行中線の向う所に取りて、以て西と爲す、
日來るの方を西行中線の背く所に取りて、以て東と爲す　是を以て
靜を言いて動を遺す者は。未だ全を言うに足らず。
然りと雖も竪は兩向を爲して。而して人は半體の天地に在り。
動なる者は定まらざれば。則ち定まる者に就きて方を取る。
定まる者に就きて方を取れば。則ち靜規矩に從う。
東西南北を定めるは。亦た人の以て廢す可からざる者なり。是を以て
全方なる者の、動靜の規矩に成るは、天なり、
偏方なる者の、十字の衡從に成るは、人なり、
是を以て升降は內に輻持す、
運轉は外に輪轉す、運すれば則ち東す、
轉ずれば則ち西す、西は則ち北を守る、
東は則ち南を守る　故に
上下內外は、圓を以て其の中に成る、之を心と謂う、
東西南北は、矩に由て其の中に成る、之を極と謂う

五五四二ー四三　一は必ず二を具す。是を以て靜圓は中外を得れば、則ち
五五四四　動直も亦た中外を得る、唯だ
五五四五ー四六　靜圓は中を得て以て無内を成す、外を得て以て無外を成す、
五五四七ー四九　動直は中を得て以て至狹を爲す、外を得て以て至廣を爲す、極の成る所なり。
五五五〇　形なる者は圓にして直を成す、故に直圓は正形を爲す、
五五五一　理なる者は直にして圓を成す、故に規矩は斜形を爲す、
五五五二　規矩は理を經緯に分つ、
五五五三　直圓は形を内外に混ず、故に
五五五四ー五五　中外の成る所は。直圓　各　有り。之を平にすれば則ち中邊なり、
五五五六ー五七　之を長くすれば則ち中端なり、剖析の成る所なり。
五五五八［中外］　物なる者は中を得て立つ、
五五五九　外を得て居る、是を以て
五五六〇　機は止を中に得ざれば、則ち動く可からず、
五五六一　體は居を外に得ざれば、則ち實す可からず、
五五六二　天地は物を同じくせず、故に　各　其の位に立つ、
五五六三　象質は動を同じくせず、故に　各　其の方に行く、是を以て
五五六四　位は靜を以て立つ、
五五六五　方は動を以て見る、

(PB 390)

*五五六六　中は坱然の外を貫く　實する有りて氣を給す、
*五五六七　外は眇焉の點を藏す　剛を以て物を保す、
五五六八　物は則ち之を給するの氣に資る、
*五五六九　氣は則ち之を保するの氣を養す、
五五七〇　資給養保は。此の間に居る、
五五七一ー七二　此の間に行く　故に物立は中外に由る、
五五七三　事行は向背を爲す　故に
五五七四　氣象なる者は、時の物、動きて其の居を常にせず　是を以て方を有す、
五五七五　氣質なる者は、處の物、止りて其の居を變えず　是を以て位を有す、故に
五五七六ー七二　行く者は氣なり、路は乃ち其の方、隱然たりと雖も　而も行く者は由らざるを得ず、
五五七八ー七八　居る者は物なり、宅は乃ち其の位、邃然たりと雖も　而も居る者は立たざるを得ず、此の故に
五五八〇　機なる者は見氣、動止の麁跡は都べて動に入る、
五五八一　體なる者は露物、虛實の麁體は同じく靜を爲す　是を以て
五五八二　方位は。處を物に於て定め。事を物に於て立つ。
五五八三　物は外を得て居り　中を得て立つ、
五五八四　氣は外を得て行き　中を得て止る、
五五八五　居る者は移る、
五五八六　行く者は復す、

(PB 391)

五五八七　止りて定まる、
五五八八　立ちて靜なり　夫れ
五五八九　處は物を容る、
五五九〇　物は處に居る、
五五九一　處は方位を容る、
五五九二　物は方位を成す　而して
五五九三　物に大小有り。小處は小方位を成す。
五五九四　素にして塊なり、
五五九五－九六　文にして歧なり　物形の態然り。
五五九七　塞體なる者は　正圓正直なり、
五五九八　質は内に在り、
五五九九　氣は外に在り、
五六〇〇　下は内に合す、
五六〇一　上は外に合す、
五六〇二　通體なる者は　斜圓斜直なり、
五六〇三　南北は相い背く、
五六〇四　東西は相い面す、
五六〇五　日影の照蔽する所と、

(I 440a)

五六〇六　兩極の隱見する所は、
五六〇七ー〇八　必ず地の半を分つ。人は地の半に倚りて。以て輿地を平望す。
五六〇九　日の出入に從いて、而して東西　成る、
五六一〇　極の隱見に由りて、而して南北　分る、
五六一一　縄は上下を生ず、
五六一二　身は中邊を定む、
五六一三　規矩を衡從して。東西南北を定む。是れ人の地面の條理に從いて。而して
五六一四　方位を定むる者なり。人は又た其の形に就きて方位を分つ。則ち
五六一五　前後左右。本末内外。以て紀す。此を以て彼に比す。
五六一六　天に合する所の上下内外は、我に於て本末内外を分つ、
五六一七　地に有する所の東西南北は、我に於て前後左右を爲す、
五六一八　小物は小天地を成す、
五六一九　小大は同じく天地を有す、
五六二〇　小大は　各　方位を具す、
五六二一　衡從横竪の條理は。上下内外の位、
五六二二　東西南北の方、之を四紀と謂う。
五六二三　上下は中外に合す、
五六二四　表裏は内外に合す、

(PB 392)

五六二五* 衡從は東西南北に合す。
五六二六 小物は本末内外の位、
五六二七 前後左右の方を資りて爲す、
五六二八* 動植は又た其の中に反す。
五六二九* 動本は上に在り、
五六三〇 植本は下に在り、
五六三一 （編集による空白）
五六三二 外は則ち表皮なり、
五六三三 内は則ち裏肉なり、
五六三四 前後左右を。動は身の面背手足に於て分つ、
五六三五 植は葉の面背中邊に於て見す、
五六三六* 彼此は類を異にするを以て。而して其の氣を異にす。氣の異なるを以て。
五六三七ー三八 理形方位は同じからざるなり。故に日月星辰の其の行を經緯にする、
五六三九* 雲雷水火の其の行を升降する、
五六四〇 山壑の拗突、
五六四一ー四二 水潮の流遡は、理に随いて變化す。
五六四三 天地は已に成器を得。已に其の物を全す。
五六四四 成器は絪縕し。物は其の中に生ず。

五六四五　動植は形を塊歧に於て分つ、
五六四六　　理を邪曲に於て爲す、
五六四七　植は地に著きて竪立す、
五六四八　動は地を離れて横行す
五六四九　動植の竝立は。塊歧に随う。次第に其の文を開く。
五六五〇ー五一　金石も亦た植なり、其の形を塊然とす、而して艸木は則ち歧然として文を開く、
五六五二ー五三　介甲は亦た動なり、其の形を塊然とす、而して禽獣は則ち歧然として文を開く、故に
五六五四ー五五*　金石は僅に内外有り。未だ本末を得ず。艸木鳥獣にして。漸く本末有り。而して
五六五六　艸木は、本を下にし末を上にす、
五六五七　鳥獣は、本を上にし末を下にす、
五六五八　植なる者は質物、養を下より資る、
五六五九　動なる者は天物、養を上より受く、
五六六〇　動に首尾と曰う
五六六一　植に根幹と曰う、
五六六二　首尾根幹。上下は同じからずと雖も。而も
五六六三　艸木は、精華を末に發し、
五六六四ー六五　鳥獣は、精華上に在れば、則ち終に一本末に歸す。
五六六六　亦た各其の分に随う。各其の方位を具す。

五六六七　内外なる者は皮肉の分なり、
五六六八　本末なる者は首尾の位なり、
五六六九　人の前後左右有るは、猶お
五六七〇*　地の東西南北有るがごとし、而して
五六七一　頂の前後より。竝び下りて臍に至るを中界と爲す。
五六七二　人の此の界を有するは、猶お
五六七三　天の中線を有するがごとし、
五六七四　人は地上に在りて。半天地を以て全天地と爲す。
五六七五　圓體を觀て。而して平體と爲す。其の見界に從いて。四方を定む。
五六七六　是れ以て能く見界の條理を正すと雖も。而も直圓の眞を遺す。
五六七七　身に中界有りて左右を分つは、
五六七八　地に中線有りて南北を分つに同じ、
五六七九　南北は則ち同様なり、
五六八〇　彼れ寒ければ則ち此れ熱し、
五六八一　彼れ動けば　則ち此れ止る、
五六八二　左右は則ち同形なり、
五六八三　左持すれば則ち右轉ず、
五六八四　右行けば　則ち左止まる、

五六八五　南北は迭互の序有り、
五六八六　左右は迭互の用有り、
五六八七*　天行は東より進み、東に向きて退かず、
五六八八*　人行は前に向いて進み、後に向いて退く能わず、是を以て
五六八九　左右は南北に應ず、
五六九〇　前後は東西に應ず、而して
五六九一　南北は則ち其の用を均しくす、
五六九二　左右は則ち利鈍有る者なり。蓋し
五六九三　我は半天地を以て。全天地と爲す。
五六九四　又た中線を分ちて　各　處を分つ。故に
五六九五　北人は身を西線の北に於て偏にして、偏北を其の正地と爲す、
五六九六　南人は身を西線の南に於て偏にして、偏南を其の正地と爲す、然れば則ち
五六九七－九八　北人左右の利鈍は。南人の反を爲すか。
五六九九　或いは佗に反する者有りて我未だ識らざるか。
五七〇〇　姑く存して他日を待たん。
五七〇一　故に人は方を得て行かざれば則ち躓く、
五七〇二　　位を得て立たざれば則ち顛る、
五七〇三－〇四　天は則ち方位と立行と一なり、故に其の位有れば則ち立つ、

(I 441a)

五七〇五　其の方有れば則ち行く、

五七〇六　人は則ち方位と立行と別なり、故に

五七〇七　能者は其の位を安じ、其の道に由る、

五七〇八ー〇九　不能者は則ち顛躓に至る、是を以て人位は則ち安危有り、

五七一〇　人道は則ち淑慝有り、

五七一一　内に情欲意智を畜うるに由る。是を以て

五七一二　人生は天の自然に及ばず。

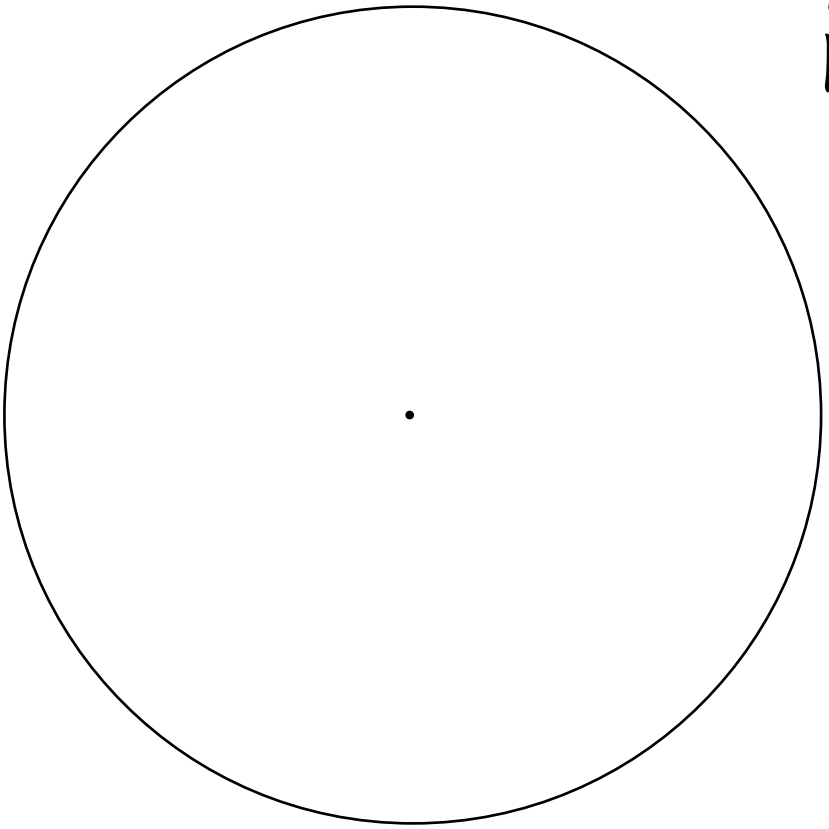
五七一三　人情は天則を得て之に法らんと欲す。

五七一四ー一五*　故に以て道を修するなり。若し能く之に法れば。則ち徳を以て其の位に居る、

五七一六　道を以て其の方に由る、

(PB 395)

中外方位圖



大小方位圖

天位
西
東
橫
北
橫
內
內
內

機界の冊

轉持

五七二二 [動靜]神本に在りては則ち活立す、
五七二三 天神に在りては則ち機跡す、
五七二四 宇宙に在りては則ち通塞す、
五七二五 天地に在りては則ち動止す、
五七二六 徳に居る、
五七二七 道に行く、
五七二八 物に定む、
五七二九 事に變ず、
五七三〇 轉に轉ず、
五七三一 持に持す、
五七三二 華に發す、
五七三三 液に收む、
五七三四 往くとして動靜に非ざる莫し。動靜は是れ機。廼ち本根の精なり。
五七三五* 此の氣は以て華液を發收す。故に
五七三六 靜なる者は其の精 以て隱る、
五七三七 動なる者は其の麁 以て見る、

五七三八1 靜を以て。神に路す、
五七三八2 物に宅す、
五七三八3 已に能く路宅を爲す。故に物の露する。虛天實地。皆其の中に在り。
五七三九 其の運轉升降。拗突高下。芸芸擾擾。皆な靜に由りて紀す。是を以て
五七四〇 動に非ざれば見る可からず、
五七四一 靜に非ざれば位す可からず、故に
五七四二 動なる者は止地を得て、變擾 以て紀する有り、
五七四三 靜なる者は動天を得て、蘊奥 以て發する有り、
五七四四 中なる者は止の宗なり。
五七四五 止なる者は靜の位に就きて言うの辭なり。
五七四六ー四七 氣物は天地を結びて。其の質は地に實す、
五七四八 其の氣は轉に達す、故に
五七四九ー五〇 天地は動止を分ちて。止まる者は天を散じ地を結ぶ、
五七五一 動なる者は天を轉じ地を持す、
五七五二 轉中は以て運轉環守す、
五七五三 持中は以て噫嘻發收す 故に
五七五四 靜は則ち天の體、混淪の物の宅する有り、
五七五五 動は則ち神の用、鬱淳の氣の活する有り、故に

(PB 399)

(I 441b)

五七五六　塞する者は靜なり、天は容れ物は居り、動の跡を見さず、
五七五七　通ずる者は動なり、時は率い期は從い、靜の物を見さず、
五七五八　止まる者は動かず、
五七五九　位は立ちて物は居る、
五七六〇　形は成りて體は立つ、
五七六一　動なる者は止まらず、
五七六二　象は旋り歲を爲す、
五七六三　質は動き運を爲す、
五七六四　轉ずる者は轉守す、
五七六五　持する者は持止す、
五七六六　發する者は鬱發す、
五七六七　收むる者は肅結す、
五七六八　剖に從いて機有り。
五七六九　［本通塞神物］
　　蓋し體は天地を成す、
五七七〇　　性は天神を成す、
五七七一ー七二　相い得て物の神を含むや。坱坱に居る、
五七七三　　衰衰に行く、

五七七四　坱坱は處を爲す、
五七七五　衰衰は時を爲す、
五七七六　坱坱は未だ方位を見ず、　象質　動きて方位を見す、
五七七七　衰衰は未だ歳運を見ず、　象質　交りて歳運　成る、
五七七八　坱坱は其の處なり、　内外は散結を容る、
五七七九　衰衰は其の時なり、　往來は歳運を成す、
五七八〇　散結は能く塞る、
五七八一　往來は能く通ず、
五七八二　塞する者は以て居る、
五七八三　通ずる者は以て行く、
五七八四　通じて行く者も亦た塞りて住す、
五七八五　塞りて居る者も亦た通じて移る、
五七八六　居る者は其の體を常にす、
五七八七　行く者は其の體を移す、
五七八八　昨の天地は、今に收む可らず、以て住の移を觀る、
五七八九*　今の事物は、昨に遺す所無し、以て移の住を觀る、
五七九〇*　是を以て通塞は精なりと雖も。亦た一動一靜の間なり。
五七九一　時處は、天なり、

五七九二　神物は　物なり、
五七九三　天は能く物を容る、
五七九四*　物は能く天に居る　是を以て
五七九五　天地は天神を用う、
五七九六　天神は天地に體す　是を以て
五七九七*　住して處を爲す者と雖も而も移る、
五七九八*　逝きて通を爲す者と雖も而も住す、
五七九九　處は容れて物は居る、
五八〇〇　天は有して神は發す、
五八〇一　時は通じて神は運ぶ、
五八〇二復元1*　是を以て處なる者は靜なり、
五八〇二復元2*　　物なる者は止なり、
五八〇三　止る者は中を得て　而して止る、
五八〇四　運ぶ者は外を得て　而して居る　是に於て
五八〇五　處は塞して物は居る、
五八〇六　時は通じて期は從う、
五八〇七　常なる者は歲を以て而して成る、
五八〇八　變する者は運を以て而して成る、

（安永本からの復元。）

（成るを爲すに訂正傍記。）

五八〇九　［歲運轉持］

蓋し率いる者は衰衰なり、行く者は緩急を爲す、
容るる者は坱坱なり、居る者は動止を爲す、

*五八一〇　緩急なる者は經の機なり、

*五八一〇復元1　動止なる者は爲の機なり、

*五八一〇復元2　經通は發收の物に由りて、而して歲運を成す、

*五八一一　緯動は散結の物に從いて、而して轉持を成す、

*五八一二　神なる者は物を用いる者なり、

*五八一三　物なる者は神に體する者なり、故に

*五八一四　衰衰坱坱。氣は動き物は止る。

*五八一五　一は統べ而して二は分る。故に

*五八一五復元1　各體は物を爲す、

五八一六　各神は事を用う、

五八一七　物は虛に　非ざれば則ち實す、

*五八一八　用は居るに非ざれば則ち行く、故に

五八一九　天動地止は、居りて動く、

五八二〇　神爲天成は、立ちて行く、故に

五八二一　運轉環守、　噫喻發收なる者は、動止なり、

五八二二

(I 442a)

歲運の消長　象行の盈縮なる者は、緩急なり、是を以て
體に居り氣に行く。以て事物成る。
没露體用。往くとして然らざる無きなり。
大小の間は。則ち大は天地を以て動止す、
（欄外加筆につき削除。）
大は天地を以って動止す、
小は天地に由りて動止す、
天地を以ってする者は、行居　方位を露せず、
天地に由りてする者は、行居　各方位に由る、
［入形理］
蓋し物の没露は。體の虚實に由る。
體は形に由りて成る、
形は理に由りて成る、
理なる者は氣の道路なり、
形なる者は體の容貌なり、
氣　運ばざれば則ち形成らず。
形　見れざれば則ち物立たず。
體は氣物性體。全偏大小を有す。

五八四六　性　異なれば則ち物も異なり。
五八四七　物　異なれば則ち理も異なり。
五八四八　理　異なれば則ち形も異なり。
五八四九　各氣は各理に随う。
五八五〇　各理は各物に成る。是を以て
五八五一*　天地は止を以て主と爲す、圓は直を含む、
五八五二*　轉持は動を以て主と爲す、矩は規を成す、
五八五三　靜に直圓と謂う、
五八五四　動に規矩と謂う、
五八五五*　規に動西有り、氣は従いて運轉す、
五八五六*　矩に南北有り、氣は従いて噓嗡す、而して
五八五七*　圓は内外を成し、氣は此に轉持す、
五八五八*　直は上下を有し、氣は此に發收す
五八五九　内外なる者は圓の位なり、
五八六〇　上下なる者は直の位なり、
五八六一　轉持なる者は、氣なり、轉位は外を占む、持位は内を占む、
五八六二*　天地なる者は、體なり、天位は上を占む、地位は下を占む、
五八六三　天は圓を以て形と爲す、

（動を東に訂正傍記あり。）

五八六四　地は直を以て理と爲す、
五八六五　轉は規を以て形と爲す、
五八六六　持は矩を以て理と爲す、
五八六七　天なる者は動なり、
五八六八　地なる者は止なり、
五八六九　天は動を以て運轉し東西を分つ、
五八七〇　地は止を以て環守し南北を分つ、故に
五八七一　天は運轉を以て動き、環守を以て止る、
五八七二　地は土石を以て止り、嘑嗡を以て動く、
五八七三　運轉は東西に在り、
五八七四　嘑嗡は南北に在り、
五八七五　天地は理を圓中の直に於て共にす。而して以て規矩を爲す。
五八七六　圓を以てして、而して氣は轉じて西に面す、
五八七七　　象は運して東に面す、
五八七八　直を以てして、而して会は嗡いて昜は嘑く、
五八七九　　南北は代がわる面す、是を以て
五八八〇　天氣は南に嗡えば、則ち
五八八一　地氣は北に發す、而して

五八八一1（復元）其の用は半面に在り。
五八八二　而して其の間は則ち水燥の遊ぶ所なり。
五八八三　下より發して升る、
五八八四　上より結んで下る、蓋し
五八八五　地體なる者は止る、萬質は皆な親しんで此に著く、
五八八六　天氣なる者は動く、萬象は皆な親しんで此に之く、
五八八七　天を親しんで氣に之けば、則ち其の勢は輕を爲す、
五八八八　地を親しんで質に著けば、則ち其の勢は重を爲す、此を以て
五八八九　輕浮の勢、勝れば、則ち重と雖も沈むこと能わず、
五八九〇　重沈の勢、勝れば、則ち輕と雖も浮くこと能わず、
五八九一　人造を以て之を言うに。彼の舟の如し。
五八九二　虛は以て輕浮の氣を盛る。輕浮を盛るを以て。而して
五八九三　重沈も之が爲に擧げらる。而して浮くを得る。故に。
五八九四　沈實の重は、其の輕に輸れば則ち沈まず、
五八九五　輕浮の勢は、其の重に輸れば則ち浮かず、
五八九六　是を以て輕浮重沈の勢は。もと胡越に非ざるなり。
五八九七　何となれば則ち今試みに氣中より繩を以て石を繫ぎて、而して
五八九八　諸を千仞の岸に下せば、

五八九九　重は下に援きて、而して力は復た擧ぐ可からず、
五九〇〇　又た試みに姑く身を水底に潛め
五九〇一　空器に氣を盛り、
五九〇二　綸して諸を千尋の上に上ぐれば、（安永本より復元。）
五九〇三　輕は上に引きて、而して力は復た潛む可からず、蓋し
五九〇四　勢は反し。力は侔しく。事は殊にして意は同じ。（PB 404）
五九〇五―一〇　（編集による空白。）
*五九一一　［天地水火］
*五九一二　轉持なる者は、動の天地を爲す、
*五九一三　虚實なる者は、靜の天地を爲す、
*五九一四　體は形を得て成る、
*五九一五　氣は性を得て成る、
*五九一六　氣物は體なり、
*五九一七1復元　会易は性なり、
*五九一七2復元　體は物を爲せば則ち天地なり、
五九一八　性は物を爲せば則ち水火なり、
*五九一九　復元　天地は能く運轉嘘噏す、
　天に気象有り。氣は動き象は靜なり。氣は則ち一東一西なり、

五九二〇　西なる者は北を以て守る、
五九二一　東なる者は南を以て環る、
五九二二　象は則ち一聚一散なり、
五九二三　聚まる者は明にして熱なり、
五九二四　散ずる者は暗にして寒なり、
五九二五　氣は能く東すと雖も、而も東する者は象を主と爲す、
五九二六　象は能く西すと雖も、而も西する者は氣を主と爲す、
五九二七　若し西行を以て、象之に随うと爲さば、則ち
五九二八*　何を以てか日月星辰は相い南北せん、
五九二九　若し東行を以て、專ら象の行と爲さば、則ち
五九三〇　恒星は何を以てか齊しく東西せん、然り而して
五九三一*　日は轉じ影は移り、月は疾く星は遲きに由りて之を觀れば、則ち
五九三二　象中に緩急有り、
五九三三　西する者は守り定まりて疾く、
五九三四　東する者は守り環りて遲きに由りて之を觀れば、則ち
五九三五　氣中も亦た緩急有り、故に
五九三六　分ちて之を言えば、則ち氣は西し象は東す、
五九三七　合して之を言えば、則ち氣象は各おの東西す、蓋し

(I 443a)

*五九三八ー三九　西轉の一周は則ち攸遠、西する者の軸は、北を爲して立なり、
五九四〇　北する者の輪は、西を爲して横なり、
五九四一　其の中線の一規は、卽ち西中なり、
五九四二ー四三　東運の一周は則ち遠し、東する者の軸は、南を爲して立なり、
五九四四　南する者の輪は、東を爲して横なり、
五九四五　其の中線の一規は、卽ち東中なり、
五九四六　故に北軸は常に守る、
五九四七　南軸は常に環る、
五九四八　環る者は其の行遲し、
五九四九　守る者は其の行疾し、且つ
五九五〇　西する者は氣を轉ず、
五九五一　東する者は象を運す、
五九五二　象は東旋に由りて運すと雖も。亦た各自に行を爲す。
五九五三　日なる者は。象の主なり。路は東中に緣る。故に
五九五四　參差の間。準を日行に於て取る。蓋し
五九五五　西する者を以て正と爲れば。則ち東する者は斜なり。
*五九五六　猶お舟の將に行かんとして。而して正しく風に對す可からずして。勢を避けて斜に走るがごとし。
五九五七　蓋し天地の機は。一動一止なり。

(PB 405)

五九五八　動は外に在れば則ち東西す、
五九五九　　内に在れば則ち噓噏す、
五九六〇　東西と噓噏と同じく氣なり。
五九六一－六二　天の轉を爲す、東　明なれば則ち西は暗なり、
五九六三　　西　明なれば則ち東は暗なり、
五九六三*　故に一線東行すれば則ち一線西行す、
五九六四　物は之に從いて一動一息す、
五九六五－六六　地の持を爲す、南　寒ければ則ち北は熱す、
五九六七　　北　寒ければ則ち南は熱す、
五九六七*　故に一邊の氣噓すれば則ち一邊の氣噏す、
五九六八　物は之に從いて一長一消す　故に
五九六八*　地氣なる者は燥なり、此に從いて升る、
五九六八2（復元）　天質なる者は水なり、此に從いて降る、故に
五九六九　日影は東西の中に在りて東西す、
五九七〇　水燥は上下の中に在りて上下す、
五九七一　上升下降、上面始めて轉ず、
五九七二　東運西轉、下面始めて持す、
五九七三　天の偏覆する無きは、西するを以てなり、

五九七四　日の偏照する無きは、東するを以てなり、故に
五九七五　氣に東西の轉有り、
五九七六　象に順逆の行有り、
五九七七　西轉は日をして逆行して以て年を成さしむ、
五九七八　東轉は日をして順行して以て歲を成さしむ、是に於て
五九七九　氣は東西南北すれば、則ち
五九八〇　象は明暗寒熱す、
五九八一　明暗は東西を得て晝夜を成す、
五九八二　寒熱は南北を得て冬夏を成す、
五九八三　華液は能く鬱發凝融す、
五九八四　天地なる者は體物、處を　得て居る、
五九八五　華液なる者は性物、天地を得て居る、是を以て
五九八六　天地は運轉噓嗡有り、
五九八七　華液は鬱發凝融有り　其の事は同じ。
五九八八　鬱易は發して火を爲す、
五九八九　凝会は融けて水を爲す、
五九九〇　天地なる者は長持の物、解結聚散は緯に於て成る、
五九九一　水火なる者は相換の物、解結聚散は經に於て成る、而して

(I 443b)

(PB 406)

五九九二　鬱する者は止る、
五九九三　發する者は動く、
五九九四　凝する者は收む、
五九九五　融する者は發す、
五九九六［運轉噦噦］
五九九七　夫れ天なる者は圓にして端無し、
　　地なる者は直にして端有り、
五九九八　直にして端有る者は長なり、
五九九九　體の天圓に有せらるるを以てなり、而して地は一小圓塊を爲す、
六〇〇〇　圓にして端無き者は大なり、
六〇〇一　氣の地直に持せらるるを以てなり、而して轉は一平長線を爲す、
六〇〇二　圓にして端無し、
六〇〇三　運轉は行を中に分つ、
六〇〇四　運轉は唯一の圓線なり、
六〇〇五　一線は西轉し、一線は東運するは、圓の道なり、
六〇〇六　東して盡きず、西して窮まらざるは、直の道なり、
六〇〇七　長逝を以てして東運は盡きず、西轉は窮まらず、
六〇〇八　循環を以てして西轉し東運し、往復は輪を爲す、

六〇〇九　氣は運轉を爲す、
六〇一〇　物は順逆を爲す　故に
六〇一一　日行は月を逆えて朔を爲す、
六〇一二　日行は月の去るを送りて望を爲す、
六〇一三　月と日は行を天中に於て通ず、
六〇一四　東西は順逆し〉以て上下を分つ、
六〇一五　日行は天の舊位に會するの頃を　一歲と爲す、
六〇一六　轉行は地の舊位に會するの頃を　一轉と爲す、
*六〇一七　日は東して遲し、
*六〇一八　西に轉じて疾し、
*六〇一九　緩は疾中に在り。東する者は西す。
六〇二〇　東する者は天を周る、
六〇二一　西する者は地を周る　故に
六〇二二　日の周天は歲を爲す、
*六〇二三　　周地は日を爲す、轉の數に非ざるなり。
*六〇二四　直にして端有り、
六〇二五　嘼喁は氣を中に於て分つ、
六〇二六　嘼喁は唯一の直氣なり、

（六〇一〇―一四はデジタル資料31の左を採る。）（PB 407）

六〇二七－二八　半邊は内に嗡ゝ　半邊は外に嘑ゝ　直の道なり、
六〇二九－三〇　嘑は極まれば則ち嗡う　嗡は極まれば則ち嘑ゝ　圓の道なり、
六〇三一　長逝を以てして、而して此に嗡し　彼に嘑ゝ
六〇三二　循環を以てして南北は嘑嗡し　往復は輻を爲す、
六〇三三　氣は嘑嗡を爲す、
六〇三四　物は發收を爲す、故に
六〇三五　氣嘑は物發を得て夏を爲す、
六〇三六　氣嗡は物收を得て冬を爲す、
*六〇三七　日と地と、同じく物を爲す、是に於て地氣は南北嘑嗡し　日と轉持を分つ、
*六〇三七1［天象運行］*朱書
*六〇三七2　是を以て同じく是れ一日月、以て東行を爲し、以て西行を爲す、
是を以て同じく是れ一日月、以て南煦を爲し、以て北煦を爲す、
*六〇三八－六九　・・・削除・・・　（欄外上段追記）
*六〇七〇　地質は止物なり、
六〇七一　天象は動物なり、
六〇七二　天行は地を周る、
六〇七三　象行は天を周る、
六〇七四　天行は象を回し。象は翻えって地を周る。　（D資料34左冒頭△印）

（I 444a）

日は西線を環って一點を成し、一盈一縮を示す　而して一周天は其の中に在る、
而して其の間は、星は東に移り　天は西に移る、
月は月道を環って一轉を成し、一遲一疾を示す　而して一周天は其の外に出づ、
而して其の間は、日は東に往き、交西に後る　故に
周天の會期は。各天の成紀に非ざるなり。
日月の天を周るを順行と爲し、
　地を周るを逆行と爲すは、神爲なり。
天の日に會すれば則ち一歲成り、
日の地に會すれば則ち一日成るは、天成なり。是を以て
日月の體は、會して朔成り、違いて望成る、
運轉の線は、會して分成り、違いて至成る、
　分なる者は春秋の中なり、
　至なる者は冬夏の端なり、
混地二面。一面一背。故に
我の居る所を面と爲し。居らざる所を背と爲す。
面する所は觀る可し、
背する所は察す可し、故に
面北の人は南を背にす、故に

(I 444b)

六〇九三　日は北すれば則ち夏なり、
六〇九四　　南すれば則ち冬なり、
六〇九五　北向の衢に當れば則ち春なり、
六〇九六　南向の衢に當れば則ち秋なり、
六〇九七　面南の地は北を背にす、
六〇九八　日は北すれば則ち冬なり、
六〇九九　　南すれば則ち夏なり、
六一〇〇　北向の衢に當れば則ち秋なり、
六一〇一　南向の衢に當れば則ち春なり、故に
六一〇二―〇三　混地の經用は。一邊は雪を降らせば、
六一〇四　　一邊は雷を發す。是を以て
六一〇五　面背を分てば、則ち晝夜冬夏有り、
六一〇六　混地を以てすれば則ち夏卽冬なり、夜卽晝なり、
六一〇七―〇八*　・・・削除・・・　（小字傍記につき削除。）
六一〇九　是を以て會違交錯の狀は。日は天を周りて東し、西線を依違して西す、
六一一〇　　月は天を周りて東し、東線を依違して西す、
六一一一　月の東線を一周するを、一章と曰う、（安永本から復元。）
六一一二　日の西線を一周するを、一紀と曰う（同前。）

順逆の數う可き者成る。

六一一三　地道は靜にして易わる、

六一一四　天道は動にして定まる、故に

六一一五*　地物の往來は、亂れて變ず、

六一一六*　天物の往來は、錯りて定す、

六一一七*　日月運轉の會違は。人之を止地に驗し。而して其の紀を認む。

六一一八　日の一周地は。之を一百に刻す。

六一一九　日月一會。三十日に儉す。故に

六一二〇　日一周天の頃は。天を爲して轉ぜらる。周地すること三百六十五にして贏る。

六一二一　月と相い會すること。一十二にして贏る。贏るを得て閏を立つ。故に

六一二二　日と曰い。月と曰い。歲と曰い。閏と曰うは。

六一二三　交錯の會に成る者なり。若し芸芸の數を以て。

六一二四　實日月の紀なりと爲さば。則ち亦た焉んぞ神爲の運を知らん。夫れ

六一二五　天の數。能く無數を積むと雖も。而も亦た一なるのみ。故に

六一二六　奇偶は計を以て之を紀す。皆な人爲に出づ。

六一二七　成る者は。天なり。成る者の天に出づるを知りて。而して

六一二八　爲す者の天に非ざるを知らず。人の數に眩するなり。

六一二九　運する者は唯だ運す。各行は運轉し。引きて其の極を見ず。

六一三〇*

六一三一
六一三二
六一三三
六一三四
六一三五
六一三六
六一三七
六一三八
六一三九
六一四〇
六一四一
六一四二
六一四三
六一四四
六一四五
六一四六
六一四七
六一四八

人は天行の神爲を觀んと欲す。
故に彼の百刻二十九日。十二月。三百六十五日等の數を置きて。而して
各各の一轉。會否は其の間に成るを知る。此れ
回りて復する者の常に始終を成し。
引きて行く者の竟に始終無き所なり。唯だ人は。
得て此の坱坱を度す、

(I 445a)

得て此の衰衰を刻す　此の故に
長逝する者は、紀す可き者無し、
往復する者は　以て數う可きなり、
日月星辰は。各運遲疾を成す。一轉の間を觀るに。歩に緩急有り。
各各一轉。其の時に違う無し。
故に常に平行に歸す。歸すと雖も而も各各相い與せず。
相い與せずと雖も。而も計は日の轉に遇いて一周地するより肇まる。故に
其の氣轉象運は。氣は一に象は各なり。日の頃。
計りて一百と爲さば。則ち轉の一周地は。則ち九十九刻の餘なり。
日一百刻、月一百零三刻餘、　是れ日月の逆行なり、
日の周天、三萬六千五百二十三刻餘、
月の周天、二千七百三十二刻餘、是れ日月の順行なり

(PB 412)

六一四九　月道の西して東線を一周すること、六十八萬數百餘刻、
六一五〇　順行一周すれば、則ち逆行六千五百七十七回餘、
六一五一　日道の西して西線を一周すること、凡そ若干億、
六一五二　順行一周すれば、則ち逆行の日は其の刻に應ずるなり、故に
六一五三　西する者を逆行の日月と爲す、
六一五四　東する者を順行の日月と爲す、
六一五五　其の會違を説けば。則ち月は　半周天にして。而して日と望せず。
六一五六*　更に百十刻餘を進めて朔と爲す。一周天にして。而して日に及ばず。
六一五七　又た二百二十刻餘を進めて朔を爲す。日は三百六十五周にして。
六一五八　而して轉は三百六十六周なり。蓋し
六一五九　天道は常に成る、故に其の會は差わず、人は之を計るを得る、
六一六〇　地道は變を爲す、故に會否は常無し、之を計る可からず、故に
六一六一　曆紀を以て之を計れば。則ち
六一六二　日の地を一周す、之を一日と爲す、
六一六三　日の月を一周す、之を一月と爲す、
六一六四　日の天を一周す、之を一歲と爲す、
六一六五　日は月に十二會す、之を一年と爲す、
六一六六　年なる者は。歲の餘を得て閏を置く。

六一六七　之を循環の間に均しくして。寒暑を差わざらしむる者なり。是の故に
六一六八　天を以て之を言えば。轉ずる者は西轉一始終して。而して復た相い積む。
六一六九　暦の紀する所の日は、則ち其の逆行の地の舊位に復するの期なり、而して
六一七〇　月の逆行は則ち標せず、
六一七一*　一歳は則ち其の順行して天の舊点に復するの期なり、而して
六一七二　月の順行は則ち日の合を數う、故に
六一七三　一月の紀なる者は、日に及ぶの時なり、
六一七四*　而して月の自行は、遅疾に見わる、遅疾は一月の紀に及ばず、
六一七五*　一歳の紀なる者は、日の舊点に復するの時なり、而して
六一七六　日の自行は。盈縮に於て見る。盈縮は還りて一歳の經を過ぐ、故に
六一七七　今の暦は。日月の會期を紀して。其の周紀を謂うに非ず。故に
六一七八　月は常に明魄を半にす。朔望は。地より望むに成る。
六一七九*　日月は各一周。閏餘は則ち會を以て紀するに成る。
六一八〇　是を以て地なる者は一圓塊。長線に繋りて止まる。
六一八一　天は地と反す、
六一八二　日は地と比す、
六一八三　故に日の逆行する者は、東西に由る、晝夜の成る所、群動の動息は之に率う、
　順行する者は、南北に由る、冬夏の成る所、萬物の發收は之と與にす、

六一八四　烟起り氣溼り、雷發し雪結び、
六一八五　鳥獸の氄革し、艸木の榮枯するは、物の發收に從うなり、
六一八六　風狂い雨旋り、地震え天鳴るは、物の鬱發を爲すなり、
六一八七［小物］華なる者は、一氣の英華なり、
六一八八　液なる者は、大物の滋液なり、
六一八九（復元）液無ければ則ち體成らず、
六一九〇（復元）華無ければ則ち氣見れず、
六一九一（復元）是を以て華なる者は易氣の發する所なり、
六一九二（復元）　液なる者は會體の融する所なり、
六一九三　是を以て天地轉持と。水燥日影とは。性體相い合す。
六一九四　天地轉持は物を開く、
六一九五　日影水燥は氣を交う、
六一九六　小物は以て其の間に生化す。是を以て
六一九七　大小の物は。同じく聚散解結す。
六一九八　聚散解結は。緯に露すれば則ち靜なり、
六一九九　　經に露すれば則ち動なり、
六二〇〇　氣聚り質結んで、物能く生ず、
六二〇一　氣散じ質解けて、物能く化す、

(PB 414)

六二〇二 生化は何爲れぞ廼ち一動一植せん。是れ之を小物と爲す。
六二〇三 大は小を容る、
六二〇四 常は變を容る、
六二〇五 小なる者は麁なり、往來して體を換える、
六二〇六 大なる者は精なり、生化して體を一にす、
六二〇七 麁を以て精を徵す、
六二〇八 常を以て變を察す、
六二〇九 此れ猶お彼れのごとし、
六二一〇 彼れ猶お此れのごとし、
六二一一 是を以て散結して常を持する者は、生化の端を没す、
六二一二 散結して體を換える者は、生化の端を露す、
六二一三 是を以て金石は攸久に成壞す、
六二一四 雲雨は倏忽に聚散す
六二一五 皆な道は異にして居は同じ。
六二一六 動なる者は有意なり、
六二一七 植なる者は無意なり、
六二一八 有意なれば則ち能く動なり、
六二一九 無意なれば則ち能く靜なり、而して

(I 446a)

(PB 415)

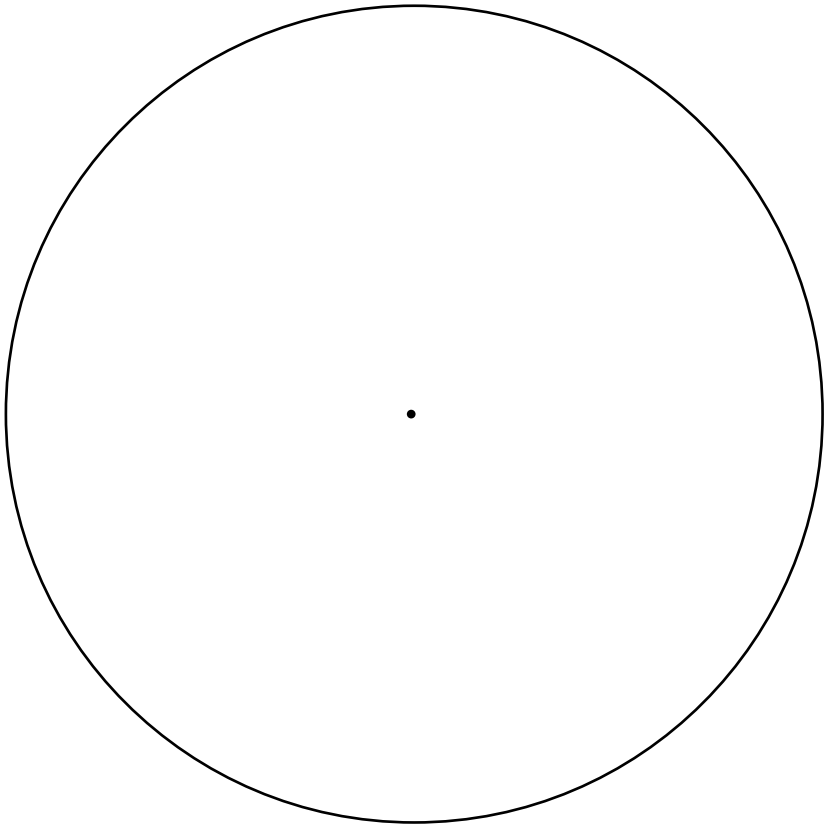
六二二〇　動は能く作止す、
六二二一　植は能く榮枯す、故に
*六二二二　其の之に成る在るや、氣は聚散し、物は解結す、
*六二二三　其の之に成る在るや、動は作止し、植は榮枯す、
六二二四　作止の變に至りては。則ち
六二二五　剖くに随いて體各性を具す。
六二二六　體性は愈いよ分れて。而して態は愈いよ同じからざるなり。
*六二二七　是を以て植は靜を以て形體の變を極む、
*六二二八　動は動を以て動作の變を極む、
六二二九　天行は持に於て止る、
六二三〇　地行は轉に於て止る、
六二三一　氣轉象運は、圓を以て行く、
六二三二　雲騰雨墜は、直を以て行く、
六二三三　水は斜に流る、潮は斜に遡る、
六二三四　鳥は氣を御す、魚は水に游ぶ、
六二三五　獸は地を走る、龜は水に泳ぐ、
六二三六　蚤は能く跳ぶ、虱は能く跂う、
六二三七　蟹は横行す、蝦は郤飛す、

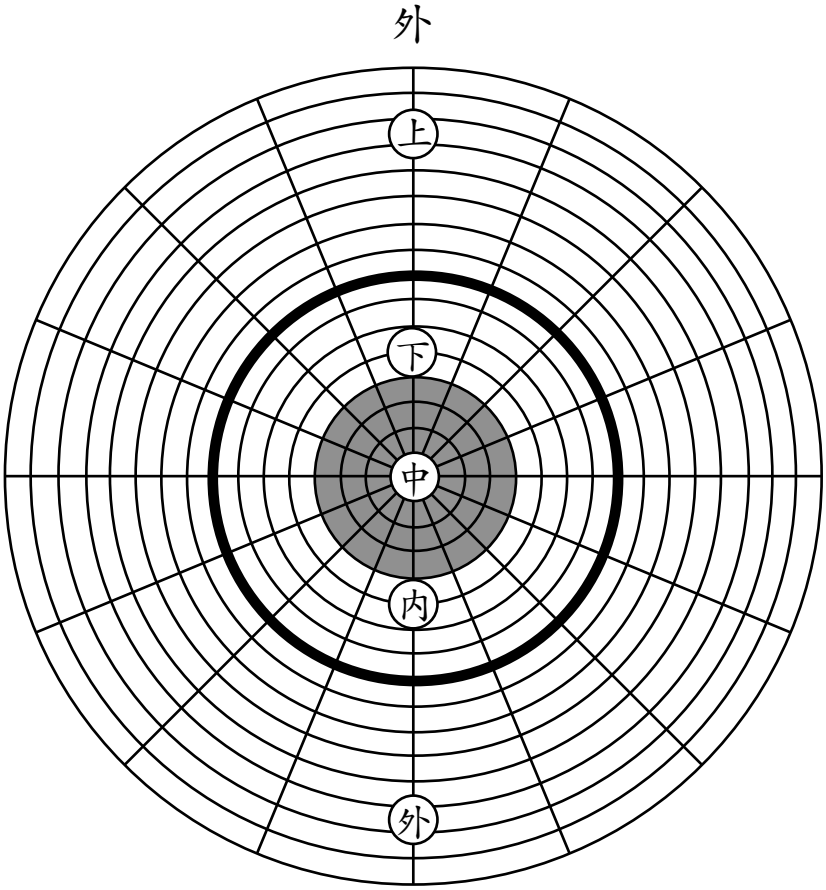
六二三八　人は立行す、　螺は倒行す、
六二三九　蛛は絲を走る、　鼈は土を穿つ、
*六二四〇　水母は唯だ浮く、　海參は唯だ轉ず、
*六二四一　蜈蚣は多足を得て行き、　反鼻は無足を以て行く、
*六二四二　獸は四腳にして行く、　人は雙腳にして歩く、　行の變を極むるなり、
六二四三　日月は轉に居り、　雲烟は持に居る、
六二四四　植は土に居し、　動は氣に居す、
六二四五　魚龍は水に居し、　藻苔は石に居す、
六二四六　獸は伏し、　人は臥す、
六二四七　鳥は枝を掴み、　蛾は壁に點す、
六二四八　梟鷺は能く浮び、　魚鼈は能く潜む、
六二四九　物は正しく處して、　伏翼倒懸す、
六二五〇　物は夜休みて、　鴟鵂は晝睡る、　止の變を極むるなり、
*六二五一―五二　故に生生の跡は。　金石は自から凝し、　變化の由る所を隠す、
六二五三　螺蛤は交わらず、　感應の跡する所を没す、
六二五四　華實は已に見る、　牝牡最も著るし、
六二五五―五六　跡に就き其の變を極むるに。　動に牝牡有り、
六二五七　植は華實有り、

六二五八　動は卵胎を分つ、
六二五九―六〇　植は子根を分つ、而して動植に氣化有り、體化有り、是を以て
六二六一　植は或いは實を結ぶ。
六二六二　或いは子無し。
六二六三　或いは瓤を肉中に生ず。
六二六四　或いは實を皮中に成す。
六二六五　或いは根より生ず、
六二六六　或いは華より結ぶ、
六二六七　麻は華と子を分ち。
六二六八　紫檀は葉と子と一にす。
六二六九　水物の薄感。羽族の薄交。
六二七〇　魚は一胎數萬。人は數交一孕なり。
六二七一　鳥は能く卵に伏し。魚は卵に伏せず。
六二七二　蝘蜓は子を螵蛸に結び。蜘蛛は兒を囊中に畜う。
六二七三　細に之を觀れば則ち或いは子を抱く者有り。或いは卵を負う者有り。
*六二七四　是を以て。其の行止する所。
六二七五　［委曲入機］

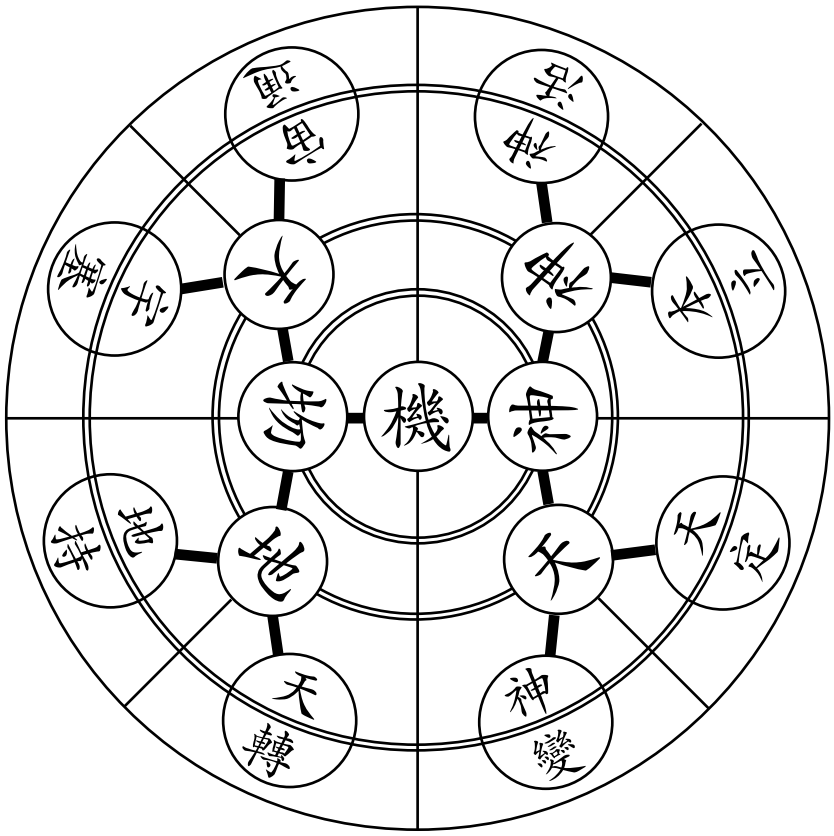
六二七六　天に在るの氣象は、則ち東西南北す、
六二七七　地に在るの氣質は、則ち噫嘔發收す、
*六二七八ー七八　然り而して萬物に至りては。則ち或いは正順、
六二八〇　或いは乖忤、
六二八一　或いは滑通、
六二八二　或いは澀蹟、
六二八三　是を以て人は。死生老少は經動す、
六二八四　營爲言施は緯動す、
六二八五　德は善惡を分つ、
六二八六　道は邪正を分つ、

形理轉持図一合




外
上
下
中
内
外

神物入機圖



轉持方位圖

形理

六二九三［形理］一氣は通塞す、
六二九四　大物は活立す、
六二九五ー九六　大物は已に立てば。則ち小は其の中に散ず。蓋し
六二九七　物は體に依る。
六二九八　體は形に成る。
六二九九　形は位に依る。
六三〇〇　位は物に成る。
六三〇一　外を圓にして内を虚にすれば、則ち以て物を煮る可し、
六三〇二　實を内にして外を鋭にすれば、則ち以て甲を刺す可し、
六三〇三　同じく是れ鐵なりと雖も、形異なれば則ち用同じからざるなり、
六三〇四　外を圓にして内を虚にすると雖も、而も之を造るに木を以てすれば、則ち
六三〇五　水を受く可くして、火に當てる可からず、
六三〇六　内を實にして外を鋭にすると雖も、而も之を造るに土を以てすれば、則ち
六三〇七　弄す可くして、而も兵と爲す可からず、
六三〇八　其の形を同じくすと雖も、而も
六三〇九　體異なれば則ち用は同じからざるなり、故に
六三一〇　同一の土泥は、之を瓦にすれば則ち風雨を覆う可し、

之を甕にすれば則ち酒漿を盛る可し、
六三一一　同一の木片は、神を模せば而して後に蘋蘩の敬を致す可し、
六三一二　屐を削りて而して後に土泥の汚を避く可し、
六三一三　人造に因りて以て天造を窺う。
六三一四　其の轉持を爲すや、形の直圓に分る、
六三一五　其の山水を爲すや、形の拗突に由る、是を以て
六三一六　體は必ず形を成すと雖も、而も形は體に非ざるなり。
六三一七　形は必ず體に由ると雖も、而も體は形に非ざるなり。
六三一八　氣なる者は活するに依りて動なり、
六三一九　物なる者は立するに依りて靜なり、
六三二〇　立すれば則ち中外は位を成す、
六三二一　氣體は物を爲す、
六三二二　其の理は靜に於て立す、
六三二三　其の氣は動に於て活す、是を以て氣は理に由りて布く、
六三二四－二五　形は氣に由りて成る、　(PB 423)
六三二六　理を以てせざれば、則ち鬱滓の活を運する所莫し、
六三二七　形を以てせざれば、則ち混淪の體を成する所莫し、
六三二八　混淪は坱然を得て居る、　(I 447a)
六三二九

六三三〇　鬱滃は衰然を得て行く、
*六三三〇1復元　而して形中も亦た自から氣物有り。形は理に依りて物を爲す、
*六三三〇2復元　氣は理に依りて形を布く、
*六三三一　故に通經衰衰、
六三三二　　塞緯坱坱、形理の祖なり。
六三三三　形理は痕を見して。物に從いて正斜を成す。
六三三四　正中、直圓は正を爲し、規矩は斜を爲す、
六三三五　斜中、塊圪は正を爲し、邪曲は斜を爲す、
六三三六　直圓は正にして形理を混成す、
六三三七　規矩は斜にして形理を粲立す、
六三三八　直矩は理を爲す、
六三三九　圓規は形を爲す、然り而して
六三四〇　散ずる者は其の理を邪曲にす、
六三四一　　其の形を塊圪にす、
六三四二　坱なる者は圓の地なり、
六三四三　衰なる者は直の本なり、
六三四四　塊圪は則ち直圓の變なり。故に
六三四五　直矩の理、散の邪曲、

圓規の形、散の塊歧、
動なる者は理に循わざる能わず、
靜なる者は形を成さざる能わず、
夫れ物の物を爲すや。神は體に於て活す、
　體は神に於て立す、
活は、没中に見るれば則ち通ず　露中に見るれば則ち動なり、
立は、没中に隠るれば則ち塞る　露中に隠るれば則ち靜なり、
其の塞靜は罅縫を没す、
　通動は條理を露す、
通動塞靜は。理に由りて形を成す。
理は道路を通じて。而して氣は必ず此に從いて布く。
氣の布く所は。正斜自ずから形を成す。
時は經通す、
處は緯塞す、
體は自ら靜す、
氣は能く動く、
之を均しくすれば則ち通なる者は天の動なり、
　塞なる者は天の靜なり、

六三四六
六三四七
六三四八
六三四九［正形］
六三五〇
六三五一
六三五二
六三五三
六三五四
六三五五
*六三五六
*六三五七
六三五八
六三五九
六三六〇
六三六一
*六三六二―*六三三
*六三六四

動なる者は物の通なり、
靜なる者は物の塞なり、

六三六五 物中。體は天地を成す、故に靜なり、
六三六六 氣は轉持を成す、故に動なり、
六三六七 氣體相い得て。而して天地は動靜す。故に
六三六八 靜なれば則ち天圓地直なり、
六三六九 處は止りて終に圓なり、
六三七〇 時は行きて終に直なり、
六三七一 圓は以て直を持し、中より表裏を分つ、表裏分ち難くして、而して一圓物を混成す、
六三七二 直は以て圓を運す、今より前後を分つ、前後分ち難くして、而して一逝時を滾成す、
六三七三－七四 環守は南北を爲す、
六三七五－七六 運轉は東西を爲す、
六三七七 逝く者は前後を爲す、
六三七八 旋る者は歲日を爲す、故に
六三七九 圓象の旋りて復するは、譬えば循環して走り、往けば則ち復り、復れば則ち往き、
六三八〇 終に端緒無きが若し、
六三八一 直象の往きて返するは、譬えば縄を以て之を矩し、縄盡きて直盡きずに
六三八二 引きて其の止る所を見ざるが若し。
六三八三

(PB 425)

(I 447b)

六三八四　動なるや則ち轉規守矩なり、
六三八五ー八六　上下　虛實を以て分つは、體の天地なり、虛實相い分てば、則ち直圓は混成す、
六三八七ー八八　内外　轉持を以て分つは、氣の天地なり、轉持相い分てば、則ち規矩は粲立す、是を以て
六三八九　轉持の間。轉は外を爲し、天は其の處を成す、而して象は其の中に居る、
六三九〇　持は内を爲し、地は其の物を爲す、而して質は其の上に居る、
六三九一　混成より之を觀れば、則ち持直は外に向いて圓なり、
六三九二　粲立より之を觀れば、則ち竪矩は中を貫いて規なり、
六三九三　天地を分てば、則ち轉持は合す、
六三九四　天體は自から虛なり、
六三九五　地體は自から實なり、
六三九六　轉を貫いて直なり、
六三九七　持に徹して圓なり、
六三九八　動を以て形と爲さず、
六三九九　直圓は混成す、
六四〇〇　轉持を分てば、則ち天地は合す、
六四〇一　轉氣は自から精なり、
六四〇二　持氣は自から麁なり、
六四〇三　地を貫いて矩を爲す、

天を轉じて規を爲す、
靜を以て形と爲さず、
規矩は粲立す、

靜は動中に塞す、
動は靜中に通ず、
動を容るるの靜は、靜にして跡無し、故に
之をして動かしむれば、則ち東西を碍てず、升降を妨げず、
靜を用うるの動は、動きて處を守る、故に
之をして止らしむれば、則ち南北は軸を爲し、内外は位を守る、

天地の性。二は能く合す、
一は能く分つ、
天地は靜を成す、
轉持は動を成す、而して
動靜は。同じく其の形を圓にす、
同じく其の理を直にす、唯だ
其の理は。動すれば則ち斜なり、
靜すれば則ち正なり、
然らざること能わずして然り。

六四二二　圓なる者は形なり、而して動の體を成す者なり、故に
*六四二三1　塊然として能く物に於て形す、故に其の内は包んで以て容るに足る、
*六四二三2（復元）　其の外は循いて以って環る可し、
六四二四　塊歧方扁は、種種の異形と雖も、而も
*六四二五―二六　居る者を内に統べ、行く者を外に環らす可きに於ては、
六四二六　則ち同じく塊然の體を圓に歸するを失せず、
六四二七　直なる者は理なり、而して氣の路を成す者なり、故に
六四二八1　邃乎として能く物に於て理す、故に
六四二八2（復元）　其の中は、湊まるに足り路するに足る、其の外は、轉ず可し持す可し、故に
六四二九　横竪邪曲は、千萬の態有りと雖も、而も
六四三〇　活を本に畜え、氣を末に施せば、
六四三一　則ち　邃乎の理を直に歸するに失せず、此の故に　（六四二六の対の文。）
六四三二　直は氣を體に於て運す可し、
六四三三　圓は形を體に於て成す可し、是を以て
六四三四　道は理に由りて有る、道卽理なるに非ざるなり、
六四三五　體は形に由りて成る、體卽形なるに非ざるなり、
六四三六　姑且　小を以て大を喩えんか。夫れ
六四三七　動の身首羽毛に於ると、

（I 448a）

植の根幹華葉に於ると、
體は則ち相い似たり。
禽を爲し獸を爲す。艸を爲し木を爲す。散じて萬品と爲るに至りては。
則ち何を以てか分つを爲さん。蓋し形の異を爲すや。
氣の布に從う。氣の布く所は。乃ち理の在る所なり。
理は。動に於ては脈と曰う。
植に於ては文と曰う。
玉に理と曰う。
石に砌と曰う。
山水に脈と曰う。
轉持に規矩と曰う。
活性は此より運す。
形體は是に於て成る。
氣は動に依りて通じ、體は實するを以て露す、
位は靜に依りて立ち、形は虛するを以て成る、
既に是れ靜虛なれば。形位は奚れを以てか見る。
夫れ行路の人の若き。高下は其の地に由る。而して
路　圓なれば則ち行も圓なり。路　直なれば則ち行も直なり。

六四三八
六四三九
六四四〇
六四四一
六四四二
六四四三
六四四四
六四四五
六四四六
六四四七
六四四八
六四四九
六四五〇
六四五一
六四五二
六四五三
六四五四
六四五五

六四五六　是に於て圓は運轉の爲す所に非ず。
六四五七　　直は升降の爲す所に非ざるを觀る。
六四五八　理は則ち正直斜矩なり、
六四五九　形は則ち正圓斜規なり、故に
六四六〇　形なる者は理の成る所なり、
六四六一　理なる者は形の立つ所なり、
六四六二　是を以て理　正なれば形も正なり、直は圓を成す、
六四六三　　理　斜なれば形も斜なり、矩は規を成す、故に
六四六四　天地は圓　以て直を含む
六四六五　轉守は規　以て矩を抱く、
六四六六　　圓なる者は圓にして圓、其の形は毬の如し、　無垠は以て其の大を極む、
六四六七　　直なる者は直にして圓、其の形は栗毬に比す、
六四六八　　規なる者は圓にして扁、其の形は輪の如し、　運轉は以て其の横を成す、
六四六九　　矩なる者は直にして立、其の形は車軸に比す、　幹守は以て其の竪を成すなり、
*六四七〇－七一　　持は垠る所有るを以て、而して直動の路は、轉に至りて盡る、而して其の精靜は轉持と隔てず、
六四七二　　轉は止る所有るを以て、而して平運の路は、持に至りて無し、而して其の麁動は能く横竪を分つ、
*六四七三　　圓は能く直と混成す、精にして靜なり、
*六四七四　　矩は能く規と粲立す、麁にして靜なり、

六四七五　直は中より外を貫ぬけば、則ち止りて靜なり、
六四七六　矩は端より中に徹すれば、則ち旋りて動なり、故に
六四七七　矩は軸を爲す、
六四七八　規は輪を爲す、
六四七九　規と矩と、同じく其の理を直にす、
六四八〇　圓は外を爲す、
六四八一　直は内を爲す、
六四八二　圓と直と、同じく其の形を圓にす、
六四八三　其の形を混成すれば、則ち經は衰として緯は坱たり、未だ直圓の痕を見さず、
六四八四　其の物を粲立すれば、則ち弥いよ規矩の體を變ず、
六四八五　體は以て虚實す、［入斜］　（I 448b）
六四八六　機は以て動靜す、
六四八七　機體の間は。性は水火を成す、
六四八八　體は山壑を成す、
六四八九　星辰は其の上に横して、而して其の行を衡從にす、
六四九〇　動植は其の下に立ちて、而して其の體を本末にす、
六四九一　山なる者は塊然の體なり、其の形を拗突にす、
六四九二　壑なる者は歧然の體なり、其の理を邪曲にす、夫れ　（PB 428）

物の成る所は。性は活して氣は運す、
體は充ちて形は成る、
氣は徒らに運せず。理に由りて運す。
理なる者は。氣運の通路。理に随いて氣を布き形を成す。
大物　混然として圓を爲す者は、其の理の直を以てなり
合すれば則ち圓成す　而して直は其の中に立つ
分かてば則ち直理す　而して圓は其の表に成る
運する者は活の性なり　資りて始まる所　有り
給して繼ぐ有り　故に　（有と給の間に朱で所と書き入れあり。）
本は中に歸す、
中は外に之く、　是を以て地は塊然たる一毬なり　其の氣は發收す、
發收は代るがわる用して、一嘘一噏す
發收は圓に從う、
嘘噏は直に從う
嘘噏に從いて南北の用を見す、
全物　上下は中外と伴う　而して能く圓を成す、故に之を下に資る　以て之を上に發す、
地用は二にして相い闢く、
面背は南北に於て更るがわるして、而して

六五一五　能く直を爲す、故に之を向う所に用う
六五一六　以て之を背く所に廢す
六五一六1（復元）一は則ち全す、
六五一六2（復元）二は則ち相い闕く、是を以て一體は必ず二用を爲す、
六五一六3（復元）故に同じく是れ一日行。以て經緯の行を分つ。
六五一六4（復元）經行は、或いは順行し、或いは逆行す、
六五一六5（復元）緯行は、或いは北行し、或いは南行す
六五一七　是を以て一塊の大物。氣の資る所、圓は中外を有す、
六五一八　用の成る所、直は面背を分つ
六五一九　中外なる者は定位なり、能く其の處を定む
六五二〇　面背なる者は變用なり、或いは面し或いは背く、故に
六五二一　其の緯に於て成る者は、半面を北と爲す、
六五二二　半面を南と爲す、
六五二三　半面を晝と爲す、
六五二四　半面を夜と爲す、
六五二五　其の一直の貫ぬく所は、端を兩極に於て露す、
六五二六　一平の分かつ所は、界を中線に於て爲す、故に
六五二六*1復元　日は其の道を側てて。而して一南一北す。

經に於て成る者は、

（安永本より復元。）

六五二六2復元
一極地　晝なれば、　則ち一極地は夜なり、
六五二六3復元
一邊境　夏なれば、　則ち一邊境は冬なり、
六五二六4復元
一面一背。晝夜冬夏代がわる行わる。
六五二六5復元
中界兩規。西轉東運。地は止りて動かず。將に東西する者を迎えんとす。
六五二六6復元
面　日の照を受けて以て晝と爲す、
六五二六7復元
背　日の照を蔽いて以て夜と爲す、
六五二六8復元
面背の間に立てば。則ち一以て旦を爲す、
六五二六9復元
一以て暮を爲す、
六五二六10復元
故に其の體は則ち一なり、
六五二六11復元
其の用は則ち一なり、　故に圓は中外を成す、
六五二七
直は面背を分つ、　夫れ
六五二八
地の一圓塊にして。萬物は環りて之に居る。
六五二九
氣は上を爲し、質は下を爲す、
六五三〇
轉は外を爲し、持は內を爲す、　此の故に
六五三一
升る者は天に之く、
六五三二
降る者は地に著く、
六五三三
方を東西を以て定む、
六五三四
位は上下を以て立つ、
東西は規に於て分る、

(PB 430, I 449a)

六五三五ー三六　上下は直に於て分る、而して圓なる者は直なり、
六五三七　　直なる者は圓なり、
六五三八　身を北極下に置けば、則ち南地は背を爲す、
六五三九　身を南極下に置けば、則ち北地は背を爲す、是に於て
六五四〇　背地は倒懸の若し、
六五四一　中界は側立の若し、
六五四二　轉環の間に。倒側　相い移り。
六五四三　　倒側　相い成るは。二用有るに由る。
六五四四　倒側の相い同じきは、體を一にするを以てなり、
六五四五　圓成れば則ち直は其の中に在りて、圓　能く直を成す、而して形は栗毬を爲す、
六五四六　直立てば則ち圓は其の外を成して、矩　能く覜を爲す、而して理は車輪を爲す、
六五四六1復元　故に規矩を以て直圓を譬えれば。則ち
六五四七　直の地を持するは、車輪の外を環りて、而して
六五四八　輻の　散ずること能わず、
六五四九　　倚ること能わずして、盡とく軸に向うが如きなり、
六五五〇　直の天を承くるは、輿の　中に在りて、而して
六五五一　軸の　陷ること能わず、
六五五二　　墊ること能わずして、齊しく輪を承くるが如きなり、故に

六五五三　天地を以て之を觀れば、氣上質下なり、
六五五四　己れを以て之を觀れば、頭上足下なり、是を以て
六五五五　轉なる者は通の體を露すの處、
六五五六　持なる者は塞の體を示すの處、一一の分るる所なり、
六五五七　通は持を隔てず、
六五五八　塞は轉を遺さず、氣物の合する所なり、
*六五五九　一機　粲然として覘を爲す者は、其の理の直を以てなり、
六五六〇　合すれば則ち矩　立ちて、而して覘　其の外を成す、
六五六一　分るれば則ち矩　理して、而して覘　其の動に範す、
六五六二　動なる者は運の露なり、
六五六三　守する所有りて止る、
*六五六四－六五　轉ずる所有りて循る　故に守は内を持す、
*六五六六－六七　轉は横を爲す、是を以て天は混焉たる一氣なり、
*六五六八　其の氣は運轉す、運轉は互いに用す、
*六五六九　一守一環なり、
*六五七〇　運轉は覘を爲す、
*六五七一　環守は矩を爲す、
六五七二　運轉に從いて東西の用を見す、故に

六五七三　天地は靜にして、而して形理直圓なり、
六五七四　轉持は動にして、而して形理規矩なり、
六五七五　天なる者は運轉環守、一平一直なり、
六五七六　地なる者は水燥土石、一俯一立なり、
六五七七　（書き下ろし後の加筆につき削除。）
六五七八0（次行以下。六五八二ー八三は訂正後の文につき抹消。）
［塊歧邪曲］　然り而して地體は塊然たる一球なり、天行の其の理を歧にするに於て異なる、
六五七八1（復元）　天體は混焉たる一氣なり、地體の其の表を塊にするに於て異なる、故に
六五七八2（復元）　天なる者は混圓中、歧して其の理を横竪にす、
六五七八3（復元）　地なる者は一塊表、斜に其の形を歧歧にす、故に
六五八四　象質の行は、衡從本末を分つ、
六五八五　山壑の體は、拗突邪曲を分つ、
六五八六*　天轉地持は、物の體を爲す、　（I 449b）
六五八七　水燥日影は、性の物を爲す、
六五八八　體物は露地に居る、
六五八九　性物は没地に居る、故に
六五九〇　象も亦た直圓を成す、而して規矩を天地に分つ、
六五九一　質自から俯立を爲す、而して直圓を天地に合す　（PB 432）

六五九二　氣體は直圓を以てして立つ、
六五九三　象質は横竪を以てして成る、
六五九四　性は則ち会易なり、
六五九五　體は則ち氣物なり、而して
六五九六　会易と氣物と。各おの同じく天地萬物を具す。
六五九七　氣物を以て会易を統ぶれば、則ち中外を一にして、而して彼此混成す、
六五九八　会易を以て氣物に比すれば、則ち中外を各にして、而して彼此粲立す、是を以て
六五九九　體に成る者は天地なり、
六六〇〇　性に成る者は日影なり、
六六〇一　天地なる者は天轉地持なり、
六六〇二　日影なる者は氣收象發なり、
六六〇三　日象影氣、下は水質燥氣と偶す、故に
六六〇四　日影は天地と勢を張ると雖も。而も
六六〇五　影は收め日は發し、而して日は弧中に居りて、地外を繞る、
六六〇六　水は潤い燥は煦め、而して水は弦中に就きて、地表に浮く、
六六〇七　華は天間に充つ、
六六〇八　液は地表に漾う、
六六〇九　象質は各其の氣に偶して。会易の物を見す。

六六一〇　然りと雖も水燥は天地に合し、
六六一一ー一二　日影は天地に比すれば、則ち日影は能く天地と勢を張る。是に於て
六六一三　天中の萬物は、日影を得て繫る
六六一四　持中の萬物は、水燥を得て列す、
六六一五　絪縕摩盪して。上は則ち星辰を懸け、其の行を日影の間に於て衡從にし、以て能く循環す、
六六一六　下は則ち動植を化し、其の體を水燥の間に於て俯立し、以て能く鱗次す、是に於て
六六一七　動植の物は、形を塊歧に資り、愈いよ其の塊歧を變ず
六六一八　行を邪曲に資り、愈いよ其の邪曲を變ず、
六六一九*　蓋し形位は成具に成る。
六六二〇*　小物は大に資りて。以て別に天地を開く。是を以て
六六二一　直圓は理形の正に於て出づ、
六六二二　邪曲は理形の變に於て極す、
六六二三　正は直圓規矩を有す、
六六二四　斜は塊歧邪曲を有す、
六六二五　塊なる者は歧せずして、而も未だ正圓を得ず、
六六二六　歧なる者は塊せずして、而も未だ正矩を得ず、故に
六六二七　天の運する所は、其の行を歧にす、
六六二八　地の立する所は、其の體を塊にす、

(PB 433)

六六二九　星漢は最も高く、其の行は東規に循う、
六六三〇　日月は最も卑く、其の行は東規に岐す、
六六三一　块块の間。天形は正圓にして、
六六三二　　水燥は漸之を假る、
六六三三　地形は拗突を以て文章を爲す、
六六三四　望遠鏡の窺う所。日月の體は。文章を有すこと地の如し。是に於て
六六三五　天象と雖も。而も漸みて已に地に近ければ。則ち
六六三六　日月は其の體を塊にす、
*六六三七　　其の行を歧にす、其の體を塊にし、其の行を歧にすと雖も、
六六三八　地中の塊歧と同じからざる者は。天地の大分なり。故に
六六三九　輪軸既に設け。方處既に定まる者は。形の斜なり。
六六四〇　斜中に之を分てば。西規北矩、高を以てして正なり、
六六四一　　東規南矩、卑を以てして斜なり、
*六六四二　日體は塊然として、其の行は又た盈縮の輪を架す、
*六六四三（復元）　月體は塊然として、輪外に遲疾し、輪輪相い架す、
*六六四四（復元）　日に著くの諸辰は。皆輪輪を架く。
六六四五　各自から機軸を持して。星漢の脈絡を通ずるに異なるなり。
*六六四六（復元）　唯だ月の最も歧行の多きは。最も地に近きを以てなり。

（I 450a）

*六六四七　斜なる者は地物の形理なり。地中と雖も。
*六六四八　天に親なる者は自から正を含む。人目を以て之を言うに。
六六四九　四邊茫茫として、視る所は則ち一圓象なり、
六六五〇　萬里歷歷として、指す所は則ち一直線なり　是を以て
六六五一　光耀の及と、
六六五二ー五四　聲臭の至は、東西南北に徧徹す。徧なる者は圓の勢なり、
六六五五　徹なる者は直の力なり、
六六五六　是の故に大物は天地なり、
六六五七　一機は轉持なり、
六六五八　天氣地體は、同じく其の體を圓にして、而して大小を分つ、
六六五九　轉軸持輻は、同じく其の氣を直にして、而して長短を分つ、
六六六〇　運轉同規は、平側を分つ、
六六六一　環守同矩は、立倚を分つ、
六六六二　衡從は同じく横にして、而して經緯の別を有す、
六六六三　本末は同じく竪にして、而して上下の異を有す、
六六六四　塊岐は同じく物にして、而して俯立の分を有す、
六六六五　邪曲は同じく理にして、而して直圓の道を有す、故に
六六六六　大物の成は。小は居り大は容る、

(PB 434)

六六六七　短は止り長は守る、
六六六八　長矩は其の位を守りて旋る、
六六六九*　大規は其の方を轉じて旋る、
六六七〇　天圓は裏みて地を覆う、
六六七一　地直は立ちて天を載す、
六六七一1復元　一は能く分る、
六六七一2復元　一は能く合す、
六六七一3復元　直は圓を貫く、
六六七一4復元　圓は直を統ぶ、
六六七一5復元　直圓は天地の靜形を成す、
六六七一6復元　規矩は天地の動形を爲す、
六六七二　内外は分つ、
六六七三　經緯は立つ、
六六七四　外の位なる者は、圓にして容る、
六六七五　内の位なる者は、圓にして居る、
六六七六　經の方なる者は、直を以て規を爲す、
六六七七　緯の方なる者は、直を以て矩を爲す、
六六七八　直圓は靜にして體を没す、

（安永本からの復元。）

(PB 435)

六六七九* 規矩は動にして形を見す　虚中の形なり、
六六八〇 横竪の理を成し、
六六八一 塊歧の形を爲すは、實中の形なり、
六六八二 景影は處を爲して、天物は此に居る、
六六八三 水燥は處を爲して、地物は此に居る、
六六八四 天物は塊然たり、
六六八五 地物は歧然たり、
六六八六 天物は乾燥し、虚中を曲行す、
六六八七 地物は潤溼し、實中を邪行す、
六六八八 轉中、守矩は立ちて緯位を定め、平に　西の經紀を轉ず、
六六八九* 環矩は倚して緯位を運し、側して東の經象を紀す、
六六九〇* 經なる者は東西の平圓なり、
六六九一* 緯なる者は南北の守直なり、
六六九二 統ぶれば則ち竪直は自から定る、
六六九三 平圓は自から轉ず、
六六九四 分かてば則ち守りて西轉す、
六六九五 環りて東運す　是に於て
六六九六 東西は斜絡す、

(I 450b)

六六九七　南北は出入す、氣象の錯綜する所なり。
六六九八　守る者よりして、環る者を觀れば、則ち環る者は斜なり、
六六九九　環る者よりして、守る者を觀れば、則ち守る者は斜なり、而して
六七〇〇　環りて運する者は卻って遲し、
六七〇一　守りて轉ずる者は卻って疾し、　（安永本からの復元。）
六七〇二　持中　氣は圓にして、竪は水燥の物を通ず、
六七〇三　質は平にして、横は山壑の體を列す、
六七〇四　［總論］蓋し天は能く散ず、故に諸象は散布す、
六七〇五　地は能く結ぶ、故に諸質は結聚す、
六七〇六　散布する者は自から成る、故に其の形は直圓なり、
六七〇七　其の行は平側なり、
六七〇八　結聚する者は倚りて成る、故に其の形は塊圪なり、
六七〇九　其の行は邪曲なり、
六七一〇*（復元）是を以て轉の内。地の上。人と物とは天地を此に開きて。皆な覆載の間に遊ぶ。
六七一一*　風は俯し恬は立す、
六七一二*　海は拗し山は立す、而して堅生は塊然として體を閉ず、
六七一三　輭生は歧然として體を開く、
六七一四　開閉は生を別にし、邪曲は變を盡くす、

(PB 436)

*六七一五　一形は正斜を分つ。

六七一六　正なれば則ち直圓は矩を含む

六七一七　斜なれば則ち塊歧は邪曲を兼ぬ、

六七一八　正斜は錯綜し。萬形は變を極む。是を以て

六七一九　植は竪立の正を得ず、以て邪の態を盡くす、

六七二〇　動は圓轉の正を得ず、以て曲の態を盡くす、然り而して

六七二一　天物の邪曲は、行に多にして形に微なり、

六七二二　地物の邪曲は、塊歧と相い配す、夫れ

六七二三　萬の形は。天に居る者の塊然たる、

六七二四　　地に居る者の歧然たる、何を以てか其れ然らん。

六七二五　天に在る者は、散中に象を聚めること、猶お水を噴きて許多の圓滴を得るがごとし、

六七二六　斜と雖も而も諸象は塊を爲す、

六七二七　地に依る者は、結中に體を凝らすこと、猶お壁を碎きて小大の缺片を得るがごとし、　(I 451a)

六七二八　成と雖も而も歧を極む、

六七二九－三〇　天に在る者は、塊然として圓を爲す、而して明なる者は高し、一列に平布す、

六七三一　　暗なる者は卑し、參差に重畳す、

六七三二－三三　地に在る者は、歧然として變を爲す、而して植なる者は地に著く、平布して位を守る、　(PB 437)

六七三四　動なる者は天に居る、位序して變り易し、是に於て

六七三五　地上の萬形は。
六七三六　峙を爲す。陷を爲す。扁を爲す。頗を爲す。橢を爲す。稜を爲す。
六七三七　方を爲す。角を爲す。邪を爲す。曲を爲す。以て著く。以て依る。
六七三八　以て纏う。以て蔓る。以て倒る。以て正す。以て長し。以て短し。
六七三九　體行の間は。其の變を盡くさざる所莫し。
六七四〇　正圓は平を用いず、規は能く平を爲す、
六七四一　正直は竪を用いず、矩は能く竪を立す、
六七四二　平圓ならず之を曲と謂う、
六七四三　竪直ならず之を邪と謂う、
六七四四　地なる者は。體を以て輿と爲す。故に
六七四五　地は横俯す、
六七四六　氣は竪立す、
六七四七　地は拗して水の平布を容る、
六七四八　　突して燥の混圓に居る、
六七四九　艸木は邪にして立つ、
六七五〇　鳥獸は曲にして俯す、　然り而して
六七五一　星辰の行は、轉に在りて宛轉す、
六七五二　渾天の形は、地を裹みて直圓す、

六七五三　圓なれば則ち地に在る者は皆な天に在る、
六七五四　　天に在る者は皆な地に在る、
六七五五　是に於て運轉環守、嘼嚗發收は、天地の動機を見す、
六七五六　中外上下、東西南北は、天地の靜位を立す、
六七五七　天地轉持、水火山海は、以て物の體を成す、
六七五八　直圓規矩、橫竪塊歧は、以て天地の形を成す、
*六七五九ー六〇　唯だ風雲水火土石は。體を有すと雖も。而も未だ定形を持せず。是を以て
六七六一　分かてば則ち斜斜錯綜す、
六七六二　合すれば則ち直圓混成す、
*六七六三ー六四　（傍記に付き削除）
六七六五　人と物と。同じく情欲意智を具す。而して
六七六六　思惟分辨の智は。人を最と爲す。是に於て
六七六七　唯だ人のみ天地を知るに足る。
六七六八　唯だ人のみ天地を行くに足る。
六七六九　直圓規矩に資ると雖も。歧然の身を以て。邪曲の行に依る。
六七七〇　天地は正邪を有す。故に人物は正邪に資る。
六七七一　天地　正を有せずんば、則ち物は焉んぞ正を有せん、
六七七二　天地　邪を有せずんば、則ち物は焉んぞ邪を有せん、

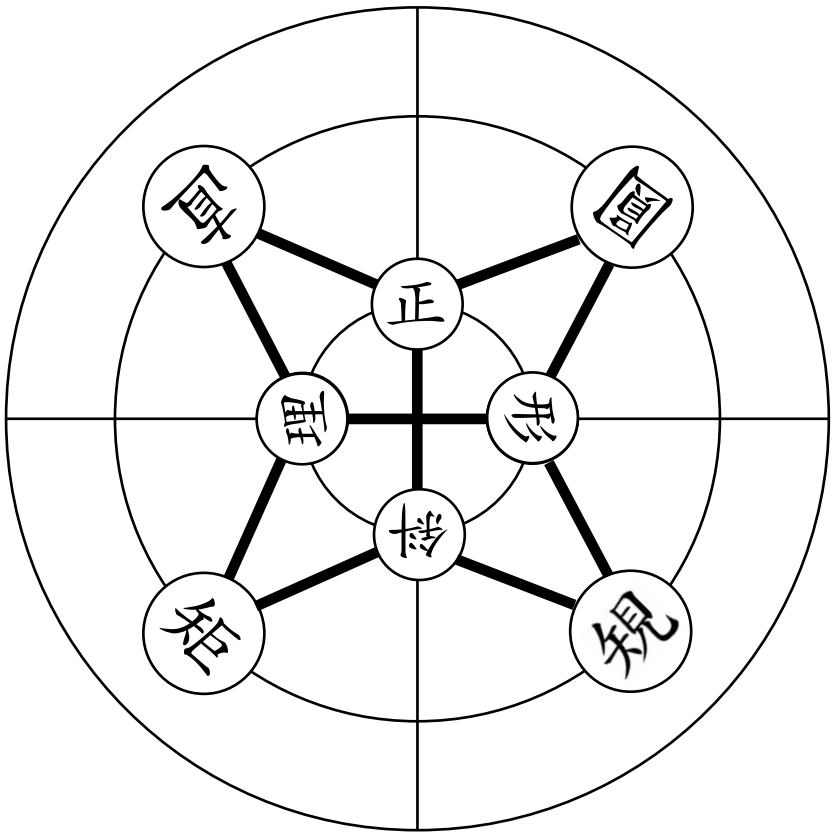
六七七三　動は必ず方を有す。人は得て之を道とす。
六七七四　天地は規矩を有す。人は得て之を則とす。故に
六七七五　圓は規を爲す、
六七七六　直は矩を爲す、
六七七七　圓の機や動なり、
六七七八　直の機や止なり、
六七七九　圓の力や轉なり、
六七八〇　直の力や持なり、
六七八一　圓の體や統なり、
六七八二　直の體や分なり、
六七八三　圓の用や混なり、
六七八四　直の用や粲なり、
六七八五　圓の化や徧なり、
六七八六　直の化や徹なり、
六七八七　圓の才や容なり、
六七八八*　直の才や斷なり、　是を以て
六七八九　靜にして圓なる者は湛なり、
六七九〇　靜にして直なる者は皦なり、

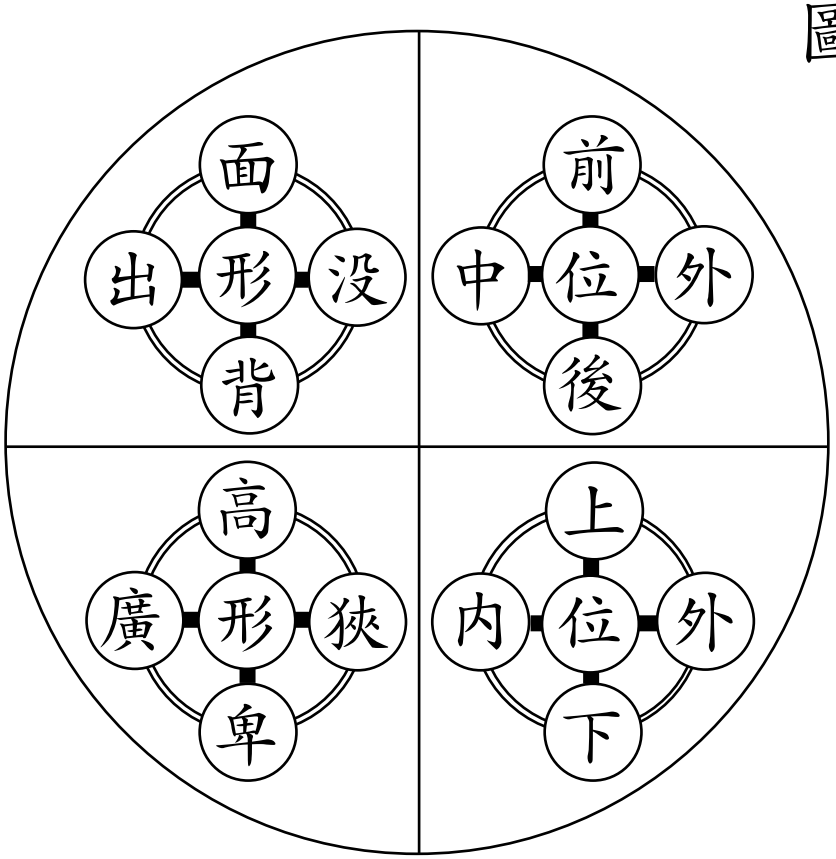
(I 452a)

六七九一　動にして圓なる者は安なり、
六七九二　動にして直なる者は正なり、
六七九三　思にして圓なる者は靄なり、
六七九四　思にして直なる者は敢なり、
六七九五　交にして圓なる者は愛なり、
六七九六　交にして直なる者は敬なり、
六七九七　望にして圓なる者は溫なり、
六七九八　望にして直なる者は莊なり、
六七九九　辞にして圓なる者は婉なり、
六八〇〇　辞にして直なる者は切なり、是を以て
六八〇一　則を有す。理を有す。紀を有す。章を有す。
六八〇二　位序粲然たる者は。直の事なり。詰る可からず。捉う可からず。
六八〇三　動きて愈いよ變じ。出て愈いよ窮まらず。
六八〇四　之を措きて其の處を知る無し。
六八〇五　之を置きて其の跡を見さず。
六八〇六　變化混然たる者は。圓の事なり。是の故に
六八〇七　直の至は、天も之に違うこと能わず、
六八〇八　圓の至は、神も之を窺うこと能わず、

六八〇九　夫の圓行直止を觀るに。
六八一〇　圓は規を爲す、
六八一一　直は矩を爲す、
六八一二　行止の規矩に中るは、聖人の事なり、
六八一三　圓ならざれば則ち曲なり、
六八一四　直ならざれば則ち邪なり、
六八一五　邪曲は則ち小人の事なり、是を以て
六八一六　智は圓ならざれば、則ち事物に通ぜず、幽明を辨ぜず、
六八一七　物我を隔てて、是非に惑う
六八一八　行　直ならざれば、則ち外は飾り内は疚し　此に縮し彼に躓く、（安永本から復元。）
六八一九　智　直ならざれば、則ち姦邪放僻　之を謀る、
六八二〇　行　圓ならざれば、則ち從容として物に役せられざるを得ず、
六八二一　粲立は痕を著す、（PB 439）
六八二二　混成は跡を没す、
六八二三　混にして能く通じ。活にして能く神し。窮まらずして變ず。痕無くして化す。
六八二四　混たらざれば則ち通ぜず。通ぜざれば神ならず。神ならざれば變ぜず。
六八二五　變ぜざれば化せず。化せざれば物を成さず。
六八二六　物を成さざれば奚れの事物か之れ有らん。（PB 440）

形理正斜圖



大小形理圖

形位相合圖